

第1章 確率・確率変数・期待値

統計推測理論は、確率論を基礎として構築される。この章では、確率論の基本的な事柄について学ぶ。

1 確率

不確実性や変動というものは多くの状況では避けることができないものである。確率論はこれらの概念を数学的に定式化する道具である。

1.1 試行・標本空間・事象

実験とか観測とか調査とかを総称して試行という。試行を行ったときに起こり得る結果のすべての集まりを標本空間といい、 Ω と記すことにする。標本空間 Ω の点を標本点とか根元事象という。 Ω が有限または可算の場合を離散的という。

例 1.1 硬貨投げを考えよう。硬貨には表 (H) と裏 (T) があることから、試行のすべての集まりである標本空間は $\Omega = \{H, T\}$ となる。

部分集合 $A \subset \Omega$ を事象といい、 Ω を全事象、 \emptyset を空事象という。事象に対して、和、交わり (積)、直積、補集合、差などの演算を考える。

事象の記法 事象に対する記法は集合に対するものと基本的には同じである。 A と B を事象とする。 a が事象 A に含まれる標本点であることを $a \in A$ と書き、 a が事象 A に含まれる標本点でないことを $a \notin A$ と書く。また、1つの標本点も含まない事象を空事象といい、 \emptyset と書く。 A が B に含まれることを $A \subset B$ と書く。 A と B の共通部分を $A \cap B := \{\omega : \omega \in A \text{ かつ } \omega \in B\}$ 、 A と B の和事象を $A \cup B := \{\omega : \omega \in A \text{ また } \omega \in B\}$ 、 A に関する B の差集合を $A \setminus B := \{\omega : \omega \in A \text{ かつ } \omega \notin B\}$ と記す。 A の補事象を $A^c := \Omega \setminus A$ と書く。

和と共通部分に対して以下が成立する .

命題 1.1 (事象の演算に関する基本的性質) A, B, C を事象とする .

$$(i) \quad \begin{aligned} A \cup A &= A \\ A \cap A &= A. \end{aligned} \quad (\text{ベキ等律})$$

$$(ii) \quad \begin{aligned} A \cup B &= B \cup A \\ A \cap B &= B \cap A. \end{aligned} \quad (\text{交換律})$$

$$(iii) \quad \begin{aligned} (A \cup B) \cup C &= A \cup (B \cup C) \\ (A \cap B) \cap C &= A \cap (B \cap C). \end{aligned} \quad (\text{結合律})$$

$$(iv) \quad \begin{aligned} A \cap (B \cup C) &= (A \cap B) \cup (A \cap C) \\ A \cup (B \cap C) &= (A \cup B) \cap (A \cup C). \end{aligned} \quad (\text{分配法則})$$

$$(v) \quad \begin{aligned} (A \cup B)^c &= A^c \cap B^c \\ (A \cap B)^c &= A^c \cup B^c. \end{aligned} \quad (\text{ド・モルガンの法則})$$

証明 証明は略 . (「集合・位相」(佐久間一浩著, 共立) や「集合・位相入門」(松坂和夫著, 岩波) 等を参照のこと) \square

一般に, 集合 Γ のそれぞれの元 γ に対して, 事象 A_γ が定まっているとき, この A_γ のなす事象の集合を「 Γ を添え字集合とする事象の族」といい,

$$\{A_\gamma : \gamma \in \Gamma\} \quad \{A_\gamma\}_{\gamma \in \Gamma}$$

と書く . 任意の濃度を持つ添え字集合 Γ に対して

$$\cup_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma = \{\omega \in \Omega : \text{ある } \gamma \in \Gamma \text{ が存在して, } \omega \in A_\gamma\}$$

$$\cap_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma = \{\omega \in \Omega : \text{すべての } \gamma \in \Gamma \text{ に対して, } \omega \in A_\gamma\}$$

とする .

例 1.2 たえば, $\Omega = (0, 1]$ とし, $A_i = [1/i, 1]$, $i = 1, 2, \dots$ とする . したがって, $\Gamma = \mathbb{N}$ (自然数) である . このとき,

$$\begin{aligned} \cup_{i=1}^{\infty} A_i &= \cup_{i=1}^{\infty} [1/i, 1] \\ &= \{\omega \in (0, 1] : \text{ある } i \in \mathbb{N} \text{ が存在して, } \omega \in [1/i, 1]\} \\ &= \Omega. \end{aligned}$$

定義 1.1 $\{A_\gamma : \gamma \in \Gamma\}$ が互いに排反 (互いに素) であるとは, すべての $\alpha, \beta \in \Gamma$ に対して, $\alpha \neq \beta$ ならば, $A_\alpha \cap A_\beta = \emptyset$ が成り立つことである.

命題 1.2 (和と交わりおよびド・モルガンの法則の一般化) $\{A_\gamma : \gamma \in \Gamma\}$ を集合族¹とする. このとき,

$$(i) \quad (\cup_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma) \cap B = \cup_{\gamma \in \Gamma} (A_\gamma \cap B).$$

$$(ii) \quad (\cap_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma) \cup B = \cap_{\gamma \in \Gamma} (A_\gamma \cup B).$$

$$(iii) \quad \{\cup_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma\}^c = \cap_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma^c.$$

$$(iv) \quad \{\cap_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma\}^c = \cup_{\gamma \in \Gamma} A_\gamma^c.$$

証明 証明は略. □

定義 1.2 可算無限個の事象列 $\{A_n\}_{n=1}^\infty$ に対して, その上極限事象と下極限事象をそれぞれ

$$\begin{aligned} \overline{\lim}_{n \rightarrow \infty} A_n &= \cap_{m=1}^\infty \cup_{n=m}^\infty A_n \\ \underline{\lim}_{n \rightarrow \infty} A_n &= \cup_{m=1}^\infty \cap_{n=m}^\infty A_n \end{aligned}$$

で定める. 上極限事象は $\{A_n\}$ のうちの無限個が起きるという事象を, 下極限事象は $\{A_n\}$ のうちのある番号から先のすべてが起こるという事象を表す. すなわち, $\omega \in \overline{\lim} A_n$ とは, 無限に多くの n に対して, $\omega \in A_n$ となることであり, $\omega \in \underline{\lim} A_n$ とは, ある番号から先のすべての n に対して $\omega \in A_n$ である. 上極限と下極限が一致するとき, $\lim_{n \rightarrow \infty} A_n$ と書き, $\{A_n\}_{n=1}^\infty$ の極限事象という.

命題 1.3 つぎの関係式が成り立つ.

$$(i) \quad \liminf_{n \rightarrow \infty} A_n \subset \limsup_{n \rightarrow \infty} A_n.$$

$$(ii) \quad \left(\liminf_{n \rightarrow \infty} A_n \right)^c = \limsup_{n \rightarrow \infty} A_n^c.$$

¹集合のあつまり

$$(iii) \quad \left(\limsup_{n \rightarrow \infty} A_n \right)^c = \liminf_{n \rightarrow \infty} A_n^c .$$

$$(iv) \quad A_1 \subset A_2 \subset \cdots \text{ ならば, } \lim_{n \rightarrow \infty} A_n = \bigcup_{n=1}^{\infty} A_n .$$

$$(v) \quad A_1 \supset A_2 \supset \cdots \text{ ならば, } \lim_{n \rightarrow \infty} A_n = \bigcap_{n=1}^{\infty} A_n .$$

証明 証明は略 .

□

1.2 確率の定義

定義 1.3 Ω の部分集合の集まり \mathcal{F} は次の条件をみたすとき, Ω 上の有限加法族であるという .

$$(i) \quad \Omega \in \mathcal{F} .$$

$$(ii) \quad A \in \mathcal{F} \implies A^c \in \mathcal{F} .$$

$$(iii) \quad A_1, A_2, \dots, A_k \in \mathcal{F} \implies \bigcup_{i=1}^k A_i \in \mathcal{F} .$$

さらに,

$$(iii)' \quad A_1, A_2, \dots, A_k, \dots \in \mathcal{F} \implies \bigcup_{i=1}^{\infty} A_i \in \mathcal{F} .$$

をみたすとき, Ω 上の完全加法族 (σ -加法族) という .

注意 1.1 $A_1, A_2, \dots, A_k, \dots \in \mathcal{F}$ ならば, $\bigcap_{i=1}^{\infty} A_i \in \mathcal{F}$ である . Ω 上の完全加法族で最も大きなものは Ω のすべての部分集合からなる族であり, 最小の完全加法族は $\{\emptyset, \Omega\}$ である .

確率論において用いられる完全加法族の重要な例をいくつか考察する . まず, 一般的な定義から始めよう .

定義 1.4 \mathcal{F} は Ω の部分集合の任意の族とする . \mathcal{F} を含む最小の完全加法族を $\sigma(\mathcal{F})$ と表す . 言い換えれば, $\sigma(\mathcal{F})$ は \mathcal{F} を含む完全加法族全体の交わりである . Ω のすべての部分集合全体は完全加法族であることから, 少なくとも 1 つは \mathcal{F} を含む完全加法族は存在することに注意しよう .

例 1.3 $\Omega = \mathbb{R}$ とし, 次の部分集合族を考える .

- (i) $\mathcal{F}_1 = \{(a, b) : a, b \in \mathbb{R}, a < b\}$.
- (ii) $\mathcal{F}_2 = \{[a, b) : a, b \in \mathbb{R}, a < b\}$.
- (iii) $\mathcal{F}_3 = \{(a, b] : a, b \in \mathbb{R}, a < b\}$.
- (iv) $\mathcal{F}_4 = \{[a, b] : a, b \in \mathbb{R}, a < b\}$.
- (v) $\mathcal{F}_5 = \{(-\infty, a] : a \in \mathbb{R}\}$.
- (vi) $\mathcal{F}_6 = \{(-\infty, a) : a \in \mathbb{R}\}$.
- (vii) \mathcal{F}_7 は \mathbb{R} の開集合の族.
- (viii) \mathcal{F}_8 は \mathbb{R} の閉集合の族.

このとき,

$$\sigma(\mathcal{F}_1) = \sigma(\mathcal{F}_2) = \sigma(\mathcal{F}_3) = \sigma(\mathcal{F}_4) = \sigma(\mathcal{F}_5) = \sigma(\mathcal{F}_6) = \sigma(\mathcal{F}_7) = \sigma(\mathcal{F}_8)$$

である. この完全加法族を $\mathcal{B}(\mathbb{R})$ と記し, \mathbb{R} のボレル集合族という.

定義 1.5 \mathcal{F} を Ω 上の完全加法族としたとき, (Ω, \mathcal{F}) のことを可測空間という.

定義 1.6 任意の可測空間 (Ω, \mathcal{F}) に対して, 確率とは \mathcal{F} 上で定義された関数 \mathbb{P} で以下の条件をみたすものである.

- (i) 任意の $A \in \mathcal{F}$ について, $\mathbb{P}(A) \geq 0$.
- (ii) $\mathbb{P}(\Omega) = 1$.
- (iii) $i = 1, 2, \dots$ について $A_i \in \mathcal{F}$ かつ $A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j)$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{i=1}^{\infty} A_i) = \sum_{i=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_i).$$

$\mathbb{P}(A)$ は事象 A の起きる確率とよばれる. $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ を確率空間とよぶ.

注意 1.2 Ω が離散のとき, \mathcal{F} は Ω のすべての部分集合の集まりと通常する. また, $\Omega = \mathbb{R}$ のとき, \mathcal{F} として, \mathbb{R} のすべての部分集合の集まりを採用するのではなく, ボレル集合族 $\mathcal{B}(\mathbb{R})$ を採用するのが標準的である.

命題 1.4 (確率の性質) (i) $\mathbb{P}(\emptyset) = 0$.

(ii) 任意の $A \in \mathcal{F}$ に対し, $\mathbb{P}(A) \leq 1$.

(iii) 任意の $A \in \mathcal{F}$ に対し, $\mathbb{P}(A^c) = 1 - \mathbb{P}(A)$.

(iv) 任意の $A, B \in \mathcal{F}$ に対し, $\mathbb{P}(A \cap B^c) = \mathbb{P}(A) - \mathbb{P}(A \cap B)$.

(v) $\mathbb{P}(A \cup B) = \mathbb{P}(A) + \mathbb{P}(B) - \mathbb{P}(A \cap B)$.

(vi) $A \subset B$ ならば, $\mathbb{P}(A) \leq \mathbb{P}(B)$.

(vii) $n = 1, 2, \dots$ に対し, $A_n \in \mathcal{F}$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} A_n) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_n).$$

(viii) $A_n \subset A_{n+1}$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} A_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(A_n).$$

(ix) $A_n \supset A_{n+1}$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cap_{n=1}^{\infty} A_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(A_n).$$

(x) $A_n \supset A_{n+1}$ かつ $\cap_{n=1}^{\infty} A_n = \emptyset$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cap_{n=1}^{\infty} A_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(A_n) = 0.$$

証明 (i) 定義 1.6(iii) において, $A_1 = A_2 = \dots = \emptyset$ とおくと $\mathbb{P}(\emptyset) = \sum_{i=1}^{\infty} \mathbb{P}(\emptyset)$ となる. この式は $\mathbb{P}(\emptyset) = 0$ のときのみ成立する.

(ii) は定義 1.6(ii) と (vi) からわかる.

(iii) 定義 1.6(iii) において, $A_1 = A, A_2 = A^c, A_3 = A_4 = \dots = \emptyset$ とおく. $A \cup A^c = \Omega$, (i) と定義 1.6(i) から $\mathbb{P}(A) + \mathbb{P}(A^c) = \mathbb{P}(\Omega) = 1$ となることよりわかる. また, $A_{n+1} = A_{n+2} = \dots = \emptyset$ とおくことより, 任意の正の整数 n に対して, $A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j)$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{i=1}^n A_i) = \sum_{i=1}^n \mathbb{P}(A_i) \quad (1.1)$$

が成立することもわかる.

(iv) $(A \cap B) \cup (A \cap B^c) = A$ と $(A \cap B) \cap (A \cap B^c) = \emptyset$ に注意して, $A_1 = A \cap B, A_2 = A \cap B^c$ として (1.1) を用いればよい.

(v) $A \cup B = A \cup (B \setminus (A \cap B))$ として, (1.1) を用いると $\mathbb{P}(A \cup B) = \mathbb{P}(A) + \mathbb{P}(B \setminus (A \cap B))$ となる. しかし, $\mathbb{P}(B) = \mathbb{P}(A \cap B) + \mathbb{P}(B \setminus (A \cap B))$ である. これを代入すればよい.

(vi) $B = A \cup (B \setminus A)$ と定義 1.6(i) から $\mathbb{P}(B) = \mathbb{P}(A) + \mathbb{P}(B \setminus A) \geq \mathbb{P}(A)$ がわかる.

(vii) 各 n に対して, $B_n = A_n \setminus (\cup_{i=1}^{n-1} A_i)$ とおくと $B_n \subset A_n$ となる. さらに, B_1, B_2, \dots は互いに排反で $\cup_{n=1}^{\infty} B_n = \cup_{n=1}^{\infty} A_n$ がわかる. したがって, 定義 1.6(iii) と (vi) から

$$\mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} A_n) = \mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} B_n) = \sum_{n=1}^{\infty} \mathbb{P}(B_n) \leq \sum_{n=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_n)$$

となる.

(viii) $A_0 = \emptyset$ とし, $B_n = A_n \setminus A_{n-1}$ とおく. B_1, B_2, \dots は互いに排反で $\cup_{n=1}^{\infty} B_n = \cup_{n=1}^{\infty} A_n$ となるので,

$$\begin{aligned} \mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} A_n) &= \mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} B_n) = \sum_{n=1}^{\infty} \mathbb{P}(B_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^n \mathbb{P}(B_i) \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{i=1}^n [\mathbb{P}(A_i) - \mathbb{P}(A_{i-1})] = \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(A_n) \end{aligned}$$

からわかる.

(ix) $B_n = A_n^c$ とおくと $B_n \subset B_{n+1}$ となる. ド・モルガンの法則 (命題 1.2(iii)) から $\{\cup_{n=1}^{\infty} A_n\}^c = \cup_{n=1}^{\infty} A_n^c = \cup_{n=1}^{\infty} B_n$ になることに注意して, (iii) および

(ix) を用いると

$$\begin{aligned} 1 - \mathbb{P}(\cap_{n=1}^{\infty} A_n) &= \mathbb{P}(\{\cap A_n\}^c) = \mathbb{P}(\cup_{n=1}^{\infty} B_n) = \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(B_n) = 1 - \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(B_n^c) \\ &= 1 - \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(A_n) \end{aligned}$$

なることからわかる．

□

2 条件つき確率と独立性

$(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ を確率空間とし, $B \in \mathcal{F}$ かつ $\mathbb{P}(B) > 0$ とする．事象 B 上の条件つき確率とは, 完全加法族 \mathcal{F} 上で定義された確率であって, 任意の $A \in \mathcal{F}$ について

$$\mathbb{P}(A|B) = \frac{\mathbb{P}(A \cap B)}{\mathbb{P}(B)}$$

で定める． $\mathbb{P}(A|B)$ を事象 B が与えられたときの事象 A の条件つき確率という．

命題 1.5 $\mathbb{P}(\cdot|B)$ は確率測度である．すなわち,

- (i) 任意の $A \in \mathcal{F}$ に対し, $\mathbb{P}(A|B) \geq 0$
- (ii) $\mathbb{P}(\Omega|B) = 1$
- (iii) $i = 1, 2, \dots$ に対し, $A_i \in \mathcal{F}$ かつ $A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j)$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{i=1}^{\infty} A_i|B) = \sum_{i=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_i|B)$$

証明 条件付確率と確率の定義 1.3 よりわかる．

□

Ω を互いに排反な事象 A_1, A_2, \dots, A_n に分割されるとする．すなわち, $A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j)$ かつ $\cup_{i=1}^n A_i = \Omega$ である． $i = 1, 2, \dots, n$ に対し, $\mathbb{P}(A_i) > 0$ のとき, 任意の事象 B の確率は条件つき確率を用いてつぎのように表現できる．

$$\mathbb{P}(B) = \sum_{i=1}^n \mathbb{P}(A_i) \mathbb{P}(B|A_i)$$

これを全確率の法則という。

事象 A_1, A_2, \dots, A_n は互いに排反で Ω を分割するとする。事象 B が起こる前と後のことを事前と事後とよぶことにする。事象 A_i に対して $\mathbb{P}(A_i)$ は事象 B が起こる前に与えられる確率であるから事前確率といい、 $\mathbb{P}(A_i|B)$ は B が起こった後で与えられる確率であるから事後確率という。

定理 1.1 (ベイズの法則) B と $A_i (i = 1, 2, \dots, n)$ を $\mathbb{P}(B) > 0, \mathbb{P}(A_i) > 0$ なる事象とする。事後確率は事前確率を用いてつぎのように表現できる。

$$\mathbb{P}(A_i|B) = \frac{\mathbb{P}(A_i)\mathbb{P}(B|A_i)}{\sum_{i=1}^n \mathbb{P}(A_i)\mathbb{P}(B|A_i)}$$

証明 全確率の法則を用いればよい。 □

定義 1.7 2つの事象 A, B が確率的に独立であるとは

$$\mathbb{P}(A \cap B) = \mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B)$$

が成り立つことをいう。独立でないとき、従属という。

注意 1.3 事象 A と B は独立で $\mathbb{P}(A) > 0, \mathbb{P}(B) > 0$ とする。このとき、

$$\mathbb{P}(B|A) = \mathbb{P}(B), \quad \mathbb{P}(A|B) = \mathbb{P}(A)$$

である。

定義 1.8 事象 A_1, A_2, \dots, A_n が独立であるとは、すべての $k \in \{2, 3, \dots, n\}$ と $i_1 < i_2 < \dots < i_k, i_l \in \{1, 2, \dots, n\}, l = 1, 2, \dots, k$, に対し

$$\mathbb{P}(\cap_{l=1}^k A_{i_l}) = \prod_{l=1}^k \mathbb{P}(A_{i_l})$$

が成り立つことである。すべての $A_i, A_j, i, j = 1, 2, \dots, n, i \neq j$ に対し

$$\mathbb{P}(A_i \cap A_j) = \mathbb{P}(A_i)\mathbb{P}(A_j)$$

が成り立つとき、対独立という。

注意 1.4 対独立であっても、独立でない場合がある。

定義 1.9 \mathcal{F}_1 と \mathcal{F}_2 を完全加法族 \mathcal{F} の部分完全加法族とする．このとき， \mathcal{F}_1 と \mathcal{F}_2 が独立であるとは，すべての $A \in \mathcal{F}_1$ と $B \in \mathcal{F}_2$ に対し

$$\mathbb{P}(A \cap B) = \mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B)$$

が成り立つことをいう．

3 確率変数

$(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ を確率空間とし， X を Ω から \mathbb{R} への写像とする． X によるボレル集合 $B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ の逆像は Ω の部分集合で $X^{-1}(B)$ と記し

$$X^{-1}(B) = \{\omega \in \Omega \mid X(\omega) \in B\}$$

で定義する．

命題 1.6 (逆像の性質) $B, B', \{B_\gamma : \gamma \in \Gamma\}$ はボレル集合とする．このとき

- (i) $B \subset B'$ ならば， $X^{-1}(B) \subset X^{-1}(B')$.
- (ii) $X^{-1}(\cup_{\gamma \in \Gamma} B_\gamma) = \cup_{\gamma \in \Gamma} X^{-1}(B_\gamma)$
 $X^{-1}(\cap_{\gamma \in \Gamma} B_\gamma) = \cap_{\gamma \in \Gamma} X^{-1}(B_\gamma)$.
- (iii) B と B' が互いに排反ならば， $X^{-1}(B)$ と $X^{-1}(B')$ も互いに排反である．
- (iv) $X^{-1}(B^c) = \{X^{-1}(B)\}^c$.

証明 集合・位相入門（松坂和夫，岩波）等を参照． □

定義 1.10 写像 $X : \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ が確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 上の (実) 確率変数であるとは，任意の $B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対して， $X^{-1}(B) \in \mathcal{F}$ をみたすときをいう．

注意 1.5 すべての $a \in \mathbb{R}$ に対して， $\{\omega \in \Omega : X(\omega) \leq a\} \in \mathcal{F}$ をみたすことと同値である．また，すべての $a \in \mathbb{R}$ に対して， $\{X < a\} \in \mathcal{F}$ とも同値である．

確率空間 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 上の確率変数 X により $(\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$ 上の確率測度 P_X がつぎのように定まる：任意の $B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対して

$$P_X(B) = \mathbb{P}(X \in B) = \mathbb{P}(\omega \in X^{-1}(B)) = \mathbb{P}(X^{-1}(B))$$

P_X のことを X の分布という。

X_1, X_2, \dots, X_p が $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 上の確率変数のとき, $\mathbf{X} = (X_1, X_2, \dots, X_p)'$ を p -次元確率変数という。

命題 1.7 (確率変数の性質) X, Y および $\{X_n\}_{n=1}^{\infty}$ は $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 上の確率変数 (列) とする。

- (i) すべての $a, b \in \mathbb{R}$ に対し, $aX + bY$ も確率変数である。
- (ii) $\max\{X, Y\}$ も $\min\{X, Y\}$ も確率変数である。
- (iii) XY も確率変数である。
- (iv) 各 $\omega \in \Omega$ に対し, $Y(\omega) \neq 0$ ならば, X/Y も確率変数である。
- (v) $\sup_n X_n, \inf_n X_n, \limsup_{n \rightarrow \infty} X_n, \liminf_{n \rightarrow \infty} X_n$ も確率変数である。

証明 (i) を示すために, $X + Y$ と aX も確率変数であることを示す。各 t に対して,

$$\{X + Y < t\} = \cup_{r \in \mathbb{Q}} (\{X < r\} \cap \{Y < t - r\}) \in \mathcal{F}$$

となる。ただし, \mathbb{Q} は有理数とする。つぎに, aX も確率変数であることを示す。 $a > 0$ の場合, $\{aX \leq t\} = \{X \leq t/a\} \in \mathcal{F}$ 。 $a < 0$ の場合, $\{aX \leq t\} = \{X \geq t/a\} \in \mathcal{F}$ 。

(ii) を示すためには,

$$\{\max\{X, Y\} \leq t\} = \{X \leq t\} \cap \{Y \leq t\}$$

と

$$\{\min\{X, Y\} \leq t\} = \{X \leq t\} \cup \{Y \leq t\}$$

に注意すればよい．

(iii) を示すためには，

$$\{X^2 \leq t\} = \{-\sqrt{t} \leq X \leq \sqrt{t}\} = \{X \leq \sqrt{t}\} \setminus \{X \leq -\sqrt{t}\}$$

から X^2 は確率変数になることに注意する．さらに，

$$XY = \frac{1}{2}\{(X+Y)^2 - (X-Y)^2\}$$

から証明される．

(iv) を示すためには，

$$\{\sup_n X_n \leq t\} = \bigcap_n \{X_n \leq t\}, \quad \{\inf_n X_n \geq t\} = \bigcap_n \{X_n \geq t\}$$

から $\sup_n X_n$ と $\inf_n X_n$ は確率変数であることがわかる．さらに，

$$\limsup_n X_n = \inf_n \sup_{k \geq n} X_k, \quad \liminf_n X_n = \sup_n \inf_{k \geq n} X_k$$

から (iv) は示された． □

定義 1.11 $(\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{P})$ 上の確率変数 X の分布関数を

$$F_X(x) = P_X((-\infty, x]) = \mathbb{P}(X \leq x) = \mathbb{P}(\omega \in \Omega : X(\omega) \leq x)$$

で定義する．ただし， x は任意に実数である．

命題 1.8 (分布関数の性質) (i) (単調性) $x, y \in \mathbb{R}$ とする．このとき， $x < y$ ならば， $F_X(x) \leq F_X(y)$ ．

(ii) (右連続性) $\lim_{y \rightarrow x+0} F_X(y) = F_X(x)$ ．

(iii) 任意の $x \in \mathbb{R}$ に対して， $0 \leq F_X(x) \leq 1$ で $F_X(-\infty) = \lim_{x \rightarrow -\infty} F_X(x) = 0$ ， $F_X(\infty) = \lim_{x \rightarrow \infty} F_X(x) = 1$ である．

証明 (i) $\{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, x]\} \subset \{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, y]\}$ に注意して命題 1.4(vi) を用いると

$$\begin{aligned} F_X(x) &= P_X((-\infty, x]) = \mathbb{P}(\{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, x]\}) \\ &\leq \mathbb{P}(\{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, y]\}) \\ &= P_X((-\infty, y]) = F_X(y). \end{aligned}$$

(ii) $\{x_n\}$ を単調列で $x_n \rightarrow x$ とする. 命題 1.4(ix) より

$$\begin{aligned} F_X(x) &= \mathbb{P}(\{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, x]\}) \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{P}(\{\omega \in \Omega : X(\omega) \in (-\infty, x_n]\}) = \lim_{n \rightarrow \infty} F_X(x_n). \end{aligned}$$

(iii) $n \rightarrow \infty$ に対して, $(-\infty, -n] \downarrow \emptyset$ と $(-\infty, n] \uparrow \mathbb{R}$ に注意する. あとは (ii) と同様にすればよい. \square

確率変数 X の分布関数が $F_X(\cdot)$ である場合「確率変数 X は分布 $F_X(\cdot)$ に従う」といい, “ $X \sim F_X$ ” と書くことにする.

注意 1.6 分布関数 $F(\cdot)$ が与えられたとき, $(\mathbb{R}, \mathcal{B}(\mathbb{R}))$ 上の確率測度 μ で

$$F(x) = \mu((-\infty, x]), \quad x \in \mathbb{R}$$

となるものが一意的存在することが知られている.

X と Y を確率変数としたとき, X と Y の分布が等しいとは, 任意の $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対し

$$P_X(A) = P_Y(A)$$

が成り立つ²ときをいう.

X と Y の分布が等しいために必要十分条件は, すべての $x \in \mathbb{R}$ に対し, $F_X(x) = F_Y(x)$ が成り立つことである.

4 確率密度関数と確率関数

定義 1.12 $F_X(\cdot)$ を確率変数 X の分布関数とする. X が連続型確率変数であるとは, F_X が \mathbb{R} 上の連続関数のときをいう. また, X が離散型確率変数

²これは $P(X \in A) = P(Y \in A)$ である.

であるとは, F_X が \mathbb{R} 上の階段関数のときをいう.

定義 1.13 X を離散型確率変数とする. X の確率関数を

$$f_X(x) = \mathbb{P}(X = x), \quad \text{すべての } x$$

で定める.

注意 1.7 確率変数 X が離散型のとき, $\{x \in \mathbb{R} : f_X(x) > 0\}$ は高々可算個であることを示すことができる. また, $f_X(x) > 0$ なる点に対し,

$$f_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x) - \mathbb{P}(X < x) = F_X(x) - \lim_{y \rightarrow x-0} F_X(y)$$

となる. $S := \{x \in \mathbb{R} : f_X(x) > 0\}$ としたとき,

$$p_i = f_X(x_i), \quad x_i \in S, \quad i = 1, 2, \dots$$

を離散型確率変数 X の分布とよぶことにする. p_i と $x_i, i = 1, 2, \dots$ を表にまとめたものを確率分布表という.

命題 1.9 (確率関数の性質) (i) $0 \leq f_X(x) \leq 1$

$$(ii) \quad \sum_{x \in S} f_X(x) = 1$$

証明 定義よりわかる. □

定義 1.14 X を連続型確率変数とし, $F_X(\cdot)$ をその分布関数とする. \mathbb{R} 上の非負値関数 $f_X(\cdot)$ で任意の $x \in \mathbb{R}$ に対して

$$F_X(x) = \int_{-\infty}^x f_X(y) dy$$

をみたすものが存在するとき, $f_X(\cdot)$ を X の確率密度関数という.

X は密度 $f_X(\cdot)$ を持つとか分布 $f_X(\cdot)$ に従うという. さらに, $F_X(\cdot)$ が \mathbb{R} 上で微分可能ならば

$$f_X(x) = \frac{d}{dx} F_X(x)$$

となる.

注意 1.8 X が連続型確率変数ならば、任意の $x \in \mathbb{R}$ において、 $\mathbb{P}(X = x) = 0$ となる。すなわち、 $\mathbb{P}(\omega \in \Omega : X(\omega) = 0) = 0$ である。なぜならば、任意の $\epsilon > 0$ に対して

$$\begin{aligned} \mathbb{P}(X = x) &\leq \mathbb{P}(x - \epsilon < X \leq x) \\ &= \mathbb{P}(X \leq x) - \mathbb{P}(X \leq x - \epsilon) \\ &= F_X(x) - F_X(x - \epsilon) \end{aligned}$$

となり、 $\epsilon \downarrow 0$ とすれば、 $F_X(\cdot)$ の連続性より

$$\mathbb{P}(X = x) \leq \lim_{\epsilon \downarrow 0} \{F_X(x) - F_X(x - \epsilon)\} = 0$$

となる。

命題 1.10 (確率密度関数の性質) (i) $f_X(x) \geq 0$.

(ii) $\int_{-\infty}^{\infty} f_X(x) dx = 1$.

(iii) 任意のボレル集合 $B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対して

$$\mathbb{P}(X \in B) = \int_B f_X(x) dx.$$

証明 定義よりわかる。 □

5 確率変数の期待値

定義 1.15 確率変数 X は確率関数または密度関数 $f_X(\cdot)$ を持つとき、 X の期待値を

$$\mathbb{E}[X] = \begin{cases} \sum_x x f_X(x), & \text{(離散型)} \\ \int_{-\infty}^{\infty} x f_X(x) dx, & \text{(連続型)} \end{cases}$$

で定義する。ただし、離散型の場合は $\sum_x |x| f_X(x) < \infty$ のとき、連続型の場合は $\int_{-\infty}^{\infty} |x| f_X(x) dx < \infty$ のとき、 X の期待値を定義することにする。期待値が定義されるとき、 X の期待値が存在するという。

一般に、 \mathbb{R} 上のボレル可測関数³ $g(\cdot)$ に対し、 $g(X)$ の期待値を

$$\mathbb{E}[g(X)] = \begin{cases} \sum_x g(x)f_X(x), & (\text{離散型}) \\ \int_{-\infty}^{\infty} g(x)f_X(x) dx, & (\text{連続型}) \end{cases}$$

で定める。 $g(X)$ の期待値の存在は X の期待値の存在と同様に定める。

例 1.4 X の確率分布は

X の取る値	0	1	合計
確率	1/2	1/2	1

とする。このとき、

$$\mathbb{E}[X] = 0 \times f_X(0) + 1 \times f_X(1) = 0 \times \frac{1}{2} + 1 \times \frac{1}{2} = \frac{1}{2}$$

となる。

例 1.5 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} 1, & (0 \leq x \leq 1) \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとする。このとき、

$$\mathbb{E}[X] = \int_{-\infty}^{\infty} x f_X(x) dx = \int_0^1 x \cdot 1 dx = \frac{1}{2}$$

例 1.6 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \frac{1}{\pi(1+x^2)}$$

を持つとする。このとき、 X の期待値は存在しない。なぜならば、 $M \geq 1$ に対して

$$\mathbb{E}[|X|] \geq \int_1^M x \frac{1}{\pi(1+x^2)} dx \geq \int_1^M \frac{x}{\pi(2x^2)} dx = \frac{1}{2\pi} \int_1^M \frac{dx}{x}$$

よって

$$\mathbb{E}[|X|] \geq \lim_{M \rightarrow \infty} \frac{1}{2\pi} \int_1^M \frac{dx}{x} = \infty$$

よりわかる。

³任意のボレル集合 $B \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対し、 $\{x \in \mathbb{R} : g(x) \in B\} \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ が成り立つような関数である。

命題 1.11 (期待値の性質) (i) 定数 c に対して, $\mathbb{E}[c] = c$

(ii) ふたつのボレル可測関数 $h(\cdot)$ と $g(\cdot)$ および定数 a, b に対して

$$\mathbb{E}[ag(X) + bh(X)] = a\mathbb{E}[g(X)] + b\mathbb{E}[h(X)]$$

(iii) $h(x) \geq 0$ ならば, $\mathbb{E}[h(X)] \geq 0$

(iv) $|\mathbb{E}[h(X)]| \leq \mathbb{E}[|h(X)|]$

(v) X が非負値確率変数⁴のとき, $\mathbb{E}[X] = 0$ ならば, $P(X = 0) = 1$ である.

ただし, 上記において, いずれの期待値も存在するものと仮定する.

証明 (i) から (iv) は積分の性質からわかる.

(v) $P(X > 0) > 0$ と仮定する. 分布関数の右連続性より, ある $\epsilon > 0$ が存在して, $P(X > \epsilon) > 0$ となる. しかし, $X \geq \epsilon \mathbb{1}\{X > \epsilon\}$ より

$$0 = \mathbb{E}[X] \geq \epsilon P(X > \epsilon) > 0$$

となり矛盾.

□

6 積率と積率母関数

定義 1.16 正の各整数 n に対して, $\mathbb{E}[|X|^n] < \infty$ のとき,

$$\mu'_n = \mathbb{E}[X^n]$$

を X の n 次の積率という. さらに,

$$\mu_n = \mathbb{E}[(X - \mu)^n]$$

を中心まわりの n 次の積率という. ただし, $\mu = \mathbb{E}[X]$ である.

定義 1.17 X の中心まわりの 2 次の積率を分散といい, $\text{VAR}[X]$ と書く. すなわち, $\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2]$ である.

⁴ $P(X \geq 0) = 1$ である. 一般には, $\mathbb{E}[X] = 0$ であっても, $P(X = 0) = 1$ ではないことに注意する.

注意 1.9 $\mathbb{E}[X^2] < \infty$ ならば, $\mathbb{E}[|X|] < \infty$ であることに注意せよ. これは Hölder の不等式からわかる. 以下では直接的に確認する. 簡単なために, X を連続型確率変数とし, 確率密度関数 $f_X(x)$ を持つとして議論を進める.

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[|X|] &= \int_{-\infty}^{\infty} |x|f_X(x) dx \\ &= \int_{-\infty}^{-1} |x|f_X(x) dx + \int_{-1}^1 |x|f_X(x) dx + \int_1^{\infty} |x|f_X(x) dx\end{aligned}$$

となる. $x \leq -1$ または $x \geq 1$ のときは, $|x|f_X(x) \leq x^2 f_X(x)$ となり, $-1 \leq x \leq 1$ のときは $|x|f_X(x) \leq f_X(x)$ となることに注意すれば,

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[|X|] &\leq \int_{-\infty}^{-1} x^2 f_X(x) dx + \int_{-1}^1 f_X(x) dx + \int_1^{\infty} x^2 f_X(x) dx \\ &\leq \int_{-\infty}^{\infty} x^2 f_X(x) dx + \int_{-\infty}^{\infty} f_X(x) dx = \mathbb{E}[X^2] + 1 < \infty\end{aligned}$$

がわかる.

定理 1.2 (分散の性質) (i) $\text{VAR}[a + bX] = b^2 \text{VAR}[X]$. ただし, a, b は定数である.

$$(ii) \quad \text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2$$

$$(iii) \quad \text{VAR}[X] = 0 \implies P(X = \mathbb{E}[X]) = 1$$

証明 (i) 分散の定義と命題 1.11(ii) より

$$\begin{aligned}\text{VAR}[a + bX] &= \mathbb{E}\{[a + bX - \mathbb{E}(a + bX)]^2\} = \mathbb{E}\{[b(X - \mathbb{E}(X))]^2\} \\ &= b^2 \mathbb{E}\{(X - \mathbb{E}(X))^2\} = b^2 \text{VAR}[X].\end{aligned}$$

$$(ii) \quad \text{VAR}[X] = \mathbb{E}\{(X - \mathbb{E}(X))^2\} = \mathbb{E}[X^2 - 2\mathbb{E}(X)X + \{\mathbb{E}(X)\}^2] = \mathbb{E}(X^2) - \{\mathbb{E}(X)\}^2.$$

(iii) $\mathbb{E}\{(X - \mathbb{E}(X))^2\} = 0$ と命題 1.11(v) から

$$\mathbb{P}\{(X - \mathbb{E}(X))^2 = 0\} = 1 \iff \mathbb{P}\{X - \mathbb{E}(X) = 0\} = 1.$$

□

定義 1.18 ある正の数 t_0 が存在して、すべての $t \in (-t_0, t_0)$ に対し、 e^{tX} の期待値が存在するならば、 X の積率母関数を

$$M_X(t) = \mathbb{E}[e^{tX}], \quad t \in (-t_0, t_0)$$

で定義する。このような t_0 が存在しないとき、 X の積率母関数は存在しないという。

定理 1.3 (積率母関数の性質) $M_X(t)$ を X の積率母関数とする。このとき、正の整数 n に対して

$$\mathbb{E}[X^n] = \left. \frac{d^n}{dt^n} M_X(t) \right|_{t=0}$$

となる。

証明 X が連続型の場合のみを示す。微分記号と積分記号の交換が可能であると仮定すれば、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} M_X(t) &= \frac{d}{dt} \int_{-\infty}^{\infty} e^{tx} f_X(x) dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \left(\frac{d}{dt} e^{tx} \right) f_X(x) dx \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} (x e^{tx} f_X(x)) dx = \mathbb{E}[X e^{tX}] \end{aligned}$$

したがって

$$\left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \mathbb{E}[X e^{tX}] \Big|_{t=0} = \mathbb{E}[X]$$

□

例 1.7 X の確率分布は

X の取る値	0	1	合計
確率	1/2	1/2	1

とする。このとき、 $t \in \mathbb{R}$ に対し

$$M_X(t) = \mathbb{E}[e^{tX}] = 1 \times f_X(0) + e^t \times f_X(1) = \frac{1}{2}(1 + e^t)$$

となる．よって

$$\mathbb{E}[X] = \left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{1}{2} e^t \right|_{t=0} = \frac{1}{2}$$

となる． X の分散は

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2] = (0 - \frac{1}{2})^2 \times f_X(0) + (1 - \frac{1}{2})^2 \times f_X(1) = \frac{1}{4}$$

となる．一方，

$$\mathbb{E}[X^2] = \left. \frac{d^2}{dt^2} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{1}{2} e^t \right|_{t=0} = \frac{1}{2}$$

より

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = \frac{1}{2} - \left(\frac{1}{2}\right)^2 = \frac{1}{4}$$

となる．

命題 1.12 確率変数 X と Y の分布関数を $F_X(\cdot)$ と $F_Y(\cdot)$ とする．ある正の数 t_0 が存在して，すべての $t \in (-t_0, t_0)$ に対し， X と Y の積率母関数 $M_X(t)$ と $M_Y(t)$ が存在して， $M_X(t) = M_Y(t)$ ならば，すべての $x \in \mathbb{R}$ に対して $F_X(x) = F_Y(x)$ である．

証明 証明は略． □

7 確率変数の変換

確率変数 X は分布関数 $F_X(\cdot)$ を持つとする． $g(\cdot)$ をボレル可測関数としたとき， $Y = g(X)$ も確率変数になり， Y の分布 P_Y はつぎのように定まる：任意のボレル集合 $A \in \mathcal{B}(\mathbb{R})$ に対して

$$P_Y(A) = \mathbb{P}(Y \in A) = \mathbb{P}(g(X) \in A)$$

また， Y の分布関数は

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(g(X) \leq y)$$

となる． P_Y は P_X と g に依存するので， $F_Y(\cdot)$ は $F_X(\cdot)$ と g に依存するであろう．さらに，存在するならば， $F_Y(\cdot)$ の確率密度関数 $f_Y(\cdot)$ も求めることができれば便利である．

以下の例では， $F_X(\cdot)$ は微分可能とする．

例 1.8 X の線形変換を考える．すなわち， $Y = a + bX$ である．ここで， a, b は定数で $b \neq 0$ とする． $b > 0$ のとき

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(a + bX \leq y) = \mathbb{P}\left(X \leq \frac{y-a}{b}\right) = F_X\left(\frac{y-a}{b}\right)$$

また， $b < 0$ のとき

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}\left(X \geq \frac{y-a}{b}\right) = 1 - \mathbb{P}\left(X \leq \frac{y-a}{b}\right) = 1 - F_X\left(\frac{y-a}{b}\right)$$

となる．したがって

$$f_Y(y) = \frac{d}{dy} F_Y(y) = \frac{1}{|b|} f_X\left(\frac{y-a}{b}\right)$$

となる．線形関数は狭義単調関数である．

例 1.9 X を正值確率変数とする．すなわち， $\mathbb{P}(X \leq 0) = 0$ である． $Y = \log X$ とおく．このとき， $y \in \mathbb{R}$ に対して

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(X \leq e^y) = F_X(e^y)$$

となる．したがって

$$f_Y(y) = \frac{d}{dy} F_Y(y) = e^y f_X(e^y)$$

となる． $g(x) = \log x$ も \mathbb{R}^+ 上では狭義単調関数である．

例 1.10 $Y = X^2$ とおく．これは \mathbb{R} 上の単調関数ではない．しかし， \mathbb{R}^+ 上と \mathbb{R}^- 上では単調である． $y > 0$ に対して，

$$\begin{aligned} F_Y(y) &= \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(\omega \in \Omega : (X(\omega))^2 \leq y) \\ &= \mathbb{P}(\omega \in \Omega : (X(\omega))^2 \leq y, X(\omega) > 0) \\ &\quad + \mathbb{P}(\omega \in \Omega : (X(\omega))^2 \leq y, X(\omega) < 0) + \mathbb{P}(\omega \in \Omega : X(\omega) = 0) \\ &= \mathbb{P}(0 < X < \sqrt{y}) + \mathbb{P}(-\sqrt{y} \leq X < 0) + \mathbb{P}(X = 0) \\ &= \mathbb{P}(-\sqrt{y} \leq X \leq \sqrt{y}) \\ &= F_X(\sqrt{y}) - F_X(-\sqrt{y}) \end{aligned}$$

となる．したがって，

$$f_Y(y) = \frac{d}{dy} F_Y(y) = \frac{1}{2\sqrt{y}} f_X(\sqrt{y}) + \frac{1}{2\sqrt{y}} f_X(-\sqrt{y})$$

となる． $y \leq 0$ に対しては $F_Y(y) = 0$ となるので， $f_Y(y) = 0$ となることは容易にわかる．よって

$$f_Y(y) = \begin{cases} \frac{1}{2\sqrt{y}} f_X(\sqrt{y}) + \frac{1}{2\sqrt{y}} f_X(-\sqrt{y}), & (y > 0), \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

となる．

これらの例を踏まえて，一般の $Y = g(X)$ の場合を考える．そのために

$$\mathcal{X} = \{x : f_X(x) > 0\}, \quad \mathcal{Y} = \{y : y = g(x), x \in \mathcal{X}\}$$

とおく． \mathcal{X} と \mathcal{Y} を X と Y の台とよぶ．たとえば， $Y = X^2$ のとき， $\mathcal{X} = \mathbb{R}$ ならば， $\mathcal{Y} = [0, \infty)$ となる．

いま，関数 $g : \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$ を考える．もし， g が一対一上への写像ならば，逆写像 $g^{-1} : \mathcal{Y} \rightarrow \mathcal{X}$ は定義できる．しかし，一般には，逆像で定義する．すなわち，

$$g^{-1}(y) = \{x \in \mathcal{X} : g(x) = y\}$$

さらに，ボレル集合 A に対し

$$g^{-1}(A) = \{x \in \mathcal{X} : g(x) \in A\}$$

とする．すると

$$\mathbb{P}(Y \in A) = \mathbb{P}(\omega \in \Omega : g(X(\omega)) \in A) = \mathbb{P}(X \in g^{-1}(A))$$

となる．しかし， Y の確率密度関数を求めるためには，追加の条件が必要となる．

命題 1.13 X を連続型確率変数とし， f_X をその確率密度関数とし， \mathcal{X} 上で連続とする．

(i) 逆関数 $g^{-1}(\cdot)$ は \mathcal{Y} 上で定義され、連続微分可能とする。このとき

$$f_Y(y) = \begin{cases} f_X(g^{-1}(y)) \left| \frac{d}{dy} g^{-1}(y) \right|, & (y \in \mathcal{Y}), \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

となる。

(ii) $\{\mathcal{X}_i\}_{i=0}^k$ を \mathcal{X} の分割⁵とし、 $\mathbb{P}(X \in \mathcal{X}_0) = 0$ とし、 $f_X(\cdot)$ は各 $\mathcal{X}_i, i = 1, 2, \dots, k$ 上で連続とする。さらに、各 $\mathcal{X}_i, i = 1, 2, \dots, k$ 上で定義された関数 $g_i(\cdot)$ が存在して、 $x \in \mathcal{X}_i$ に対し、 $g(x) = g_i(x)$ が成立し、 $g_i(x)$ は \mathcal{X}_i 上で狭義単調関数とし、 $g_i^{-1}(\cdot)$ は $\mathcal{Y} \setminus g(\mathcal{X}_0)$ 上で定義され、連続微分可能とする。このとき、

$$f_Y(y) = \begin{cases} \sum_{i=1}^k f_X(g_i^{-1}(y)) \left| \frac{d}{dy} g_i^{-1}(y) \right|, & (y \in \mathcal{Y} \setminus g(\mathcal{X}_0)), \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

となる。

証明 (i) g が狭義単調増加のとき、 $y \in \mathcal{Y}$ に対し、

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(X \leq g^{-1}(y)) = F_X(g^{-1}(y))$$

となる。よって

$$f_Y(y) = \frac{d}{dy} F_Y(y) = f_X(g^{-1}(y)) \frac{d}{dy} g^{-1}(y)$$

となる。また、 g が狭義単調減少のとき、

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \mathbb{P}(X \geq g^{-1}(y)) = 1 - F_X(g^{-1}(y))$$

となる。よって、

$$f_Y(y) = \frac{d}{dy} F_Y(y) = f_X(g^{-1}(y)) \left(-\frac{d}{dy} g^{-1}(y) \right)$$

となる。 g が単調増加のときは $(d/dy)g^{-1}(y) > 0$ 、 g が単調減少のときは $(d/dy)g^{-1}(y) < 0$ に注意すればよい。

⁵すなわち、 $\mathcal{X}_i \cap \mathcal{X}_j = \emptyset (i \neq j)$ かつ $\mathcal{X} = \cup_{i=0}^k \mathcal{X}_i$

(ii) $y \in \mathcal{Y}$ に対し,

$$F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y) = \sum_{i=1}^k \mathbb{P}(g(X) \leq y, X \in \mathcal{X}_i) = \sum_{i=1}^k \mathbb{P}(X \in g_i^{-1}((-\infty, y]))$$

となる. 最右辺の各項に対して, (i) の議論を適用すれば, (ii) は証明される. \square

例 1.11 確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-x^2/2}, \quad -\infty < x < \infty$$

を持つとする. $Y = X^2$ としたとき, Y の確率密度関数を求めよう. 関数 $g(x) = x^2$ は $(-\infty, 0)$ 上と $(0, \infty)$ 上のそれぞれで単調関数である. $\mathcal{Y} = (0, \infty)$ として, 命題 1.13 を利用するために,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_0 &= \{0\}, \\ \mathcal{X}_1 &= (-\infty, 0), & g_1(x) &= x^2, & g_1^{-1}(y) &= -\sqrt{y} \\ \mathcal{X}_2 &= (0, \infty), & g_2(x) &= x^2, & g_2^{-1}(y) &= \sqrt{y} \end{aligned}$$

とおく. Y の確率密度関数は

$$\begin{aligned} f_Y(y) &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-(\sqrt{y})^2/2} \left| -\frac{1}{2\sqrt{y}} \right| + \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-(\sqrt{y})^2/2} \left| \frac{1}{2\sqrt{y}} \right| \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{1}{\sqrt{y}} e^{-y/2}, \quad 0 < y < \infty \end{aligned}$$

となる.

例 1.12 確率変数 X は連続で分布関数 $F_X(\cdot)$ を持つとし, $Y = F_X(X)$ とおく. このとき, Y は確率密度関数

$$f_Y(y) = \begin{cases} 1 & (0 < y < 1), \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases} \quad (1.2)$$

を持つ.

$F_X(x)$ は x に関して狭義単調増加として証明⁶をする. $0 \leq F_X(x) \leq 1$ であり, $\mathbb{P}(F_X(X) \leq 0) = 0$ と $\mathbb{P}(F_X(X) \geq 1) = 0$ となるので, $y \leq 0$ のときは

⁶この命題は $F_X(x)$ が x に関して単調増加のときに成立するが, $F_X^{-1}(x)$ の定義と証明やや難しくなるので簡単な場合のみの証明を与える.

$\mathbb{P}(Y \leq y) = 0$ である . $0 < y < 1$ に対して ,

$$\begin{aligned} \mathbb{P}(Y \leq y) &= \mathbb{P}(F_X(X) \leq y) \\ &= \mathbb{P}(F_X^{-1}(F_X(X)) \leq F_X^{-1}(y)) \\ &= \mathbb{P}(X \leq F_X^{-1}(y)) \\ &= F_X(F_X^{-1}(y)) \\ &= y \end{aligned}$$

となる . $y \geq 1$ に対しては $\mathbb{P}(Y \leq y) = 1$ となる . したがって ,

$$F_Y(y) = \begin{cases} 0, & (y \leq 0), \\ y, & (0 < y < 1), \\ 1, & (y \geq 1) \end{cases}$$

となる . $0 < y < 1$ 上で $F_Y(y)$ は微分可能で導関数は 1 となる . また , $y = 0$ における $F_Y(y)$ の導関数を左微分で , $y = 1$ における $F_Y(y)$ の導関数を右微分で定めると Y の確率密度関数は (1.2) となるのがわかる .

8 確率変数の不等式 1

定理 1.4 (マルコフの不等式) 非負値確率変数 X が有限の期待値 $\mathbb{E}[X] < \infty$ をもつとき , 任意の正数 $a > 0$ に対して ,

$$\mathbb{P}\{X \geq a\} \leq \frac{1}{a} \mathbb{E}[X]$$

が成立する .

証明 X が連続型確率変数の場合を示す . X の確率密度関数を $f_X(x)$ とする .

$$\mathbb{E}[X] = \int_0^{\infty} x f_X(x) dx \geq \int_a^{\infty} x f_X(x) dx \geq a \int_a^{\infty} f_X(x) dx = a \mathbb{P}(X \geq a)$$

よりわかる . □

定理 1.5 (チェビシェフの不等式) 確率変数 X が平均 μ , 分散 σ^2 ($0 < \sigma^2 < \infty$) をもつとき, 任意の正数 $a > 0$ に対して,

$$\mathbb{P}\{|X - \mu| \geq a\} \leq \frac{\sigma^2}{a^2}$$

が成り立つ.

証明 Markov の不等式から

$$\mathbb{P}\{|X - \mu| \geq a\} = \mathbb{P}\{|X - \mu|^2 \geq a^2\} \geq \frac{\mathbb{E}[(X - \mu)^2]}{a^2}$$

よりわかる. □

例 1.13 X は平均 μ , 分散 σ^2 ($\sigma > 0$) の分布に従うとする. このとき, 任意の正の実数 t に対して,

$$\mathbb{P}\{|X - \mu| \geq t\sigma\} \leq \frac{1}{t^2} \mathbb{E}\left[\left(\frac{|X - \mu|}{\sigma}\right)^2\right] = \frac{1}{t^2} \frac{\mathbb{E}[(X - \mu)^2]}{\sigma^2} = \frac{1}{t^2}$$

となる. したがって, $t = 2$ の場合

$$\mathbb{P}\{|X - \mu| \geq 2\sigma\} \leq \frac{1}{2^2} = 0.25$$

となる.

例 1.14 Z は標準正規分布に従うとする. このとき, 任意の正の実数 t に対して,

$$\mathbb{P}\{|Z| \geq t\} \leq \sqrt{\frac{2}{\pi}} \frac{e^{-t^2/2}}{t} \tag{1.3}$$

となる.

$t = 2$ のとき, Chebychev の不等式から

$$\mathbb{P}\{|Z| \geq 2\} \leq \frac{1}{2^2} = 0.25$$

となる. しかし, (1.3) から

$$\mathbb{P}\{|Z| \geq 2\} \leq \sqrt{\frac{2}{\pi}} \frac{e^{-2}}{2} = 0.054$$

となる．また，

$$\mathbb{P}\{|Z| \geq 3\} \leq \sqrt{\frac{2}{\pi}} \frac{e^{-4.5}}{3} = 0.00295$$

となる．

(1.3) は以下からわかる．

$$\begin{aligned} \mathbb{P}\{Z \geq t\} &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_t^{\infty} e^{-z^2/2} dz \\ &\leq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_t^{\infty} \frac{z}{t} e^{-z^2/2} dz \\ &= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \left[-\frac{1}{t} e^{-z^2/2} \right]_t^{\infty} = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{e^{-t^2/2}}{t} \end{aligned}$$

と

$$\mathbb{P}\{|Z| \geq t\} = \mathbb{P}\{\{Z \geq t\} \cup \{Z \leq -t\}\} = \mathbb{P}\{Z \geq t\} + \mathbb{P}\{Z \leq -t\} = 2\mathbb{P}\{Z \geq t\}$$

からわかる．

ある区間 $I = (a, b)$ 上の実数値連続関数 $h(x)$ が凸 (convex) であるとは，任意の $c \in (0, 1)$ と任意の $x_1, x_2 \in I$ に対して，

$$h(cx_1 + (1-c)x_2) \leq ch(x_1) + (1-c)h(x_2)$$

が成り立つことである．もし， $x_1 \neq x_2$ に対して「 \leq 」のかわりに「 $<$ 」が常に成立するならば，狭義の凸関数という．

定理 1.6 (イェンセンの不等式) X を確率変数とし， $h(x)$ を X の値域を含む区間上で凸な関数とする． X と $h(X)$ の期待値が有限のとき，

$$\mathbb{E}[h(X)] \geq h(\mathbb{E}[X])$$

が成立する．もし， $h(x)$ が狭義の凸関数のとき，等号が成り立つのは 1 点分布の時に限られる．

証明 任意の固定した x_0 とある線形関数 $g(x) = ax + b$ が存在して， $h(x_0) = g(x_0)$ とすべての x に対して $h(x) \geq g(x)$ が成立する． $x_0 = \mathbb{E}[X]$ として，上

のことに利用すれば,

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[h(X)] &\geq \mathbb{E}[g(X)] \\ &= \mathbb{E}[aX + b] \\ &= a\mathbb{E}[X] + b \\ &= g(\mathbb{E}[X]) = h(\mathbb{E}[X])\end{aligned}$$

□

例 1.15 X を $\mathbb{E}[X^2] < \infty$ なる確率変数とする. Jensen の不等式を利用するために, まず, $\mathbb{E}[|X|] < \infty$ を確認する. たとえば, X が確率密度関数 $f_X(x)$ を持てば

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[|X|] &= \int_{-\infty}^{\infty} |x|f_X(x) dx \\ &= \int_{-\infty}^{-1} |x|f_X(x) dx + \int_{-1}^1 |x|f_X(x) dx + \int_1^{\infty} |x|f_X(x) dx \\ &\leq \int_{-\infty}^{-1} x^2 f_X(x) dx + \int_{-1}^1 f_X(x) dx + \int_1^{\infty} x^2 f_X(x) dx \\ &\leq \int_{-\infty}^{\infty} |x|^2 f_X(x) dx + \int_{-\infty}^{\infty} f_X(x) dx = \mathbb{E}[X^2] + 1 < \infty\end{aligned}$$

となる. X が離散型確率変数のときも同様にすれば, $\mathbb{E}[|X|] \leq \mathbb{E}[X^2] + 1$ であることがわかる. さらに, $\mathbb{E}[|X|]$ の評価が Jensen の不等式から得られる. $h(x) = x^2$ とすれば, $h(x)$ は狭義の凸関数なので, Jensen の不等式より

$$\{\mathbb{E}[X]\}^2 = h(\mathbb{E}[X]) \leq \mathbb{E}[h(X)] = \mathbb{E}[X^2]$$

となる. したがって,

$$|\mathbb{E}[X]| \leq \sqrt{\mathbb{E}[X^2]}$$

をえる.

例 1.16 a_1, a_2, \dots, a_n は正の数とし,

$$\begin{aligned} m_A &= \frac{1}{n}(a_1 + a_2 + \dots + a_n) && \text{(算術平均)}, \\ m_G &= \{a_1 a_2 \dots a_n\}^{1/n} && \text{(幾何平均)}, \\ m_H &= \frac{1}{\frac{1}{n} \left(\frac{1}{a_1} + \frac{1}{a_2} + \dots + \frac{1}{a_n} \right)} && \text{(調和平均)} \end{aligned}$$

とする. このとき,

$$m_H \leq m_G \leq m_A$$

が成立する.

Jensen の不等式を用いて示す: そのために, X を確率変数として

$$\mathbb{P}\{X = a_i\} = \frac{1}{n}, \quad i = 1, 2, \dots, n$$

とする. $-\log x$ は凸関数なので, $\mathbb{E}[\log X] \leq \log(\mathbb{E}[X])$ が成立する. したがって,

$$\log m_G = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \log a_i = \mathbb{E}[\log X] \leq \log(\mathbb{E}[X]) = \log \left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n a_i \right) = \log m_A$$

より $m_G \leq m_A$ がわかる. また,

$$\begin{aligned} \log \frac{1}{m_H} &= \log \left(\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \frac{1}{a_i} \right) = \log \left(\mathbb{E} \left[\frac{1}{X} \right] \right) \geq \mathbb{E} \left[\log \left(\frac{1}{X} \right) \right] \\ &= -\mathbb{E}[\log X] = -\log m_G \end{aligned}$$

から $m_G \geq m_H$ がわかる.

9 演習問題

問題 1.1 ジョーカーを除く 52 枚のトランプからカードを 1 枚無作為に抜き取る試行をし, 組み札に注目するとする: クラブ (C), ダイヤ (D), ハート (H), スペード (S). したがって, 標本空間は

$$\Omega = \{C, D, H, S\}$$

である. 事象 A, B を

$$A = \{C, D\}, \quad B = \{D, H, S\}$$

としたとき, つぎの事象を求めよ.

- (1) $A \cup B$
- (2) $A \cap B$
- (3) A^c

ヒント: $A \subset B \iff$ 任意の $\omega \in A$ に対し, $\omega \in B$
 $A = B \iff A \subset B$ かつ $B \subset A$

問題 1.2 つぎの等式を示せ. このとき,

- (1) $A \setminus B = A \setminus (A \cap B)$
- (2) $B = (B \cap A) \cup (B \cap A^c)$

ヒント: 事象 A に含まれる根元事象であって事象 B には含まれないものの全体をつくる事象を, A, B の差といい, $A \setminus B$ と記すことにする:

$$A \setminus B = \{\omega \in \Omega : \omega \in A \text{ かつ } \omega \notin B\}$$

問題 1.3 $a, b \in \mathbb{R} (a < b)$ とする. \mathbb{R} の部分集合に関するつぎの等式を確かめよ.

- (1) $\bigcap_{n=1}^{\infty} (a - 1/n, b) = [a, b)$
- (2) $\bigcup_{n=1}^{\infty} (a, b - 1/n] = (a, b)$
- (3) $\bigcap_{n=1}^{\infty} (a - 1/n, a] = \{a\}$
- (4) $\bigcup_{n=1}^{\infty} (-n, a] = (-\infty, a]$
- (5) $\bigcup_{n=-\infty}^{\infty} (n, n + 1] = \mathbb{R}$

ヒント: (1) の等式については, (左辺) \subset (右辺) は明らか. (左辺) \supset (右辺) を示すためには, 対偶をとり, $x \notin [a, b)$ ならば, $x \notin (a - 1/n, b)$ を言えばよい.

問題 1.4 (Ω, \mathcal{F}) を可測空間とする.

- (1) $A, B \in \mathcal{F}$ のとき, $A \cap B \in \mathcal{F}$ と $A \setminus B \in \mathcal{F}$ を示せ.
- (2) $A_1, A_2, \dots \in \mathcal{F}$ のとき, $\bigcap_{i=1}^{\infty} A_i \in \mathcal{F}$ を示せ.

ヒント: $\{\bigcup_{i=1}^{\infty} A_i^c\}^c = \bigcap_{i=1}^{\infty} A_i$ を利用せよ.

問題 1.5 事象 A, B が互いに独立のとき, つぎの対も互いに独立であることを示せ.

- (1) A^c, B^c
- (2) A, B^c
- (3) A^c, B

ヒント: $\mathbb{P}(A \cap B) = \mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B)$ を用いて, たとえば, 確率の性質 (iii) と (v) を利用して $\mathbb{P}(A^c \cap B^c) = \mathbb{P}(A^c)\mathbb{P}(B^c)$ を示せばよい. 計算は右辺から始めた方が見通しがいいようだ.

問題 1.6 大小 2 つのサイコロを投げる試行を考える. したがって, 標本空間は

$$\Omega = \{(1, 1), (1, 2), \dots, (1, 6), (2, 1), \dots, (2, 6), \dots, (6, 1), \dots, (6, 6)\}$$

である．つぎの事象を考えよう．

$$\begin{aligned} A &= \{(1, 1), (2, 2), (3, 3), (4, 4), (5, 5), (6, 6)\} \\ B &= \{\text{ふたつのサイコロの和が } 7 \text{ 以上 } 10 \text{ 以下}\} \\ C &= \{\text{ふたつのサイコロの和が } 2 \text{ または } 7 \text{ または } 8 \}\end{aligned}$$

- (1) $\mathbb{P}(A) = 1/6, \mathbb{P}(B) = 1/2, \mathbb{P}(C) = 1/3$ を確認せよ．
- (2) $A \cap B \cap C$ を求め, $\mathbb{P}(A \cap B \cap C) = \mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B)\mathbb{P}(C)$ を示せ．
- (3) $\mathbb{P}(B \cap C) \neq \mathbb{P}(B)\mathbb{P}(C)$ と $\mathbb{P}(A \cap B) \neq \mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B)$ を確認せよ．

問題 1.7 標本空間 Ω を 3 つの字 a, b, c を並べたものとする．

$$\Omega = \{aaa, abc, acb, bbb, bca, bac, ccc, cba, cab\}$$

ここからどのならばが出現する確率も $1/9$ であるとし, 事象 $A_i, i = 1, 2, 3$, を

$$A_i = \{\text{字の並びの } i \text{ 番目の字が } a\}$$

とする．

- (1) 事象 A_1, A_2, A_3 を求め, $\mathbb{P}(A_i) = 1/3$ を確認せよ．
- (2) A_1, A_2, A_3 は対独立であることを示せ．
- (3) A_1, A_2, A_3 は独立でないことを確かめよ．

問題 1.8 ふたつの事象 A, B に対して, $\mathbb{P}(A) > 0$ ならば

$$\mathbb{P}(B|A) \geq 1 - \left\{ \frac{\mathbb{P}(B^c)}{\mathbb{P}(A)} \right\}$$

が成り立つことを示せ．

ヒント :

$$\begin{aligned} A \cup B &= (A \cap B^c) \cup (A^c \cap B) \cup (A \cap B) \\ A &= (A \cap B^c) \cup (A \cap B) \\ B &= (A^c \cap B) \cup (A \cap B)\end{aligned}$$

のような互いに排反な事象に分割できることを利用するとよい．

問題 1.9 A, B, C を事象としたとき, 以下を示せ．ただし, 条件付けられた事象の確率はすべて正とする．

- (1) $\mathbb{P}(B) = 1$ ならば, すべての事象 A に対して,

$$\mathbb{P}(A|B) = \mathbb{P}(A)$$

- (2) $A \subset B$ ならば,

$$\mathbb{P}(B|A) = 1$$

かつ

$$\mathbb{P}(A|B) = \frac{\mathbb{P}(A)}{\mathbb{P}(B)}$$

(3) A と B は互いに排反ならば

$$\mathbb{P}(A|A \cup B) = \frac{\mathbb{P}(A)}{\mathbb{P}(A) + \mathbb{P}(B)}$$

(4)

$$\mathbb{P}(A \cap B \cap C) = \mathbb{P}(A|B \cap C)\mathbb{P}(B|C)\mathbb{P}(C)$$

ヒント：(i) たとえば， $B \subset A \cup B$ と $\mathbb{P}(B) = 1$ に注意し，命題 1.4(vi) を用いて， $\mathbb{P}(A \cup B) = 1$ を示す．さらに，命題 1.4(v) を利用して， $\mathbb{P}(A \cap B) = \mathbb{P}(A)$ を示せばよい．

問題 1.10 ふたつの事象 A, B に対して

$$\begin{aligned}\mathbb{P}(A|B) &= \frac{\mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B|A)}{\mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B|A) + \mathbb{P}(A^c)\mathbb{P}(B|A^c)} \\ \mathbb{P}(A^c|B) &= \frac{\mathbb{P}(A^c)\mathbb{P}(B|A^c)}{\mathbb{P}(A)\mathbb{P}(B|A) + \mathbb{P}(A^c)\mathbb{P}(B|A^c)}\end{aligned}$$

を示せ．ただし，条件付けられた事象の確率はすべて正とする．

問題 1.11 3つの箱がある：箱 1 には赤玉が 1 つと白玉が 3 つ，箱 2 には赤玉が 2 つと白玉が 2 つ，箱 3 には赤玉が 3 つと白玉が 1 つはいている．箱を 1 つ無作為に選び，選ばれた箱から玉を 1 つ取る．赤玉が取られたときに，箱 1 が選ばれた条件付き確率を求めよ．

ヒント：事象 A_i , $i = 1, 2, 3$ を「箱 i を選ぶ」とし，事象 B を「赤玉が取られる」とし， B^c を「白玉が取られる」とおいてとき， $\mathbb{P}(A_1|B)$ を求めればよいことになる． $\mathbb{P}(A_i)$ および $\mathbb{P}(B|A_i)$ の確率は題意から簡単に計算できるので，ベイズの定理を使えばよい．

問題 1.12 正しい硬貨を 2 回投げる試行を考える：表を H ，裏を T と書けば，

$$\Omega = \{HH, HT, TH, TT\}$$

となる \mathcal{F} は Ω のすべての部分集合（ 2^4 個の事象から構成される）とする．確率変数 X を表の出た回数とする：

$$X(\omega) = \begin{cases} 0, & (\omega = TT) \\ 1, & (\omega = HT, TH) \\ 2, & (\omega = HH) \end{cases}$$

である．このとき， X の分布関数を求め，そのグラフを描け．

問題 1.13

$$F_X(x) = \frac{1}{1 + e^{-x}}$$

は命題 1.8 で与えられた分布関数の条件をみたしていることを確認し，そのグラフを描け．

問題 1.14 確率変数 X は分布関数

$$F_X(x) = \begin{cases} 0 & (x < 0), \\ \frac{1}{2}x & (0 \leq x < 2), \\ 1 & (x \geq 2) \end{cases}$$

をもつとする．このとき，以下の問いに答えよ．

- (1) $F_X(x)$ のグラフを描き, 命題 1.8 で与えられた分布関数の条件をみたすことを確認せよ .
- (2) $P_X((1/2, 3/2]) = \mathbb{P}\left(\frac{1}{2} < X \leq \frac{3}{2}\right)$ を求めよ .

問題 1.15 つぎの関数を考える :

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{x(x+1)}, & x = 1, 2, 3, \dots \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

- (1) $f_X(\cdot)$ は命題 1.9 で与えられた確率関数の条件をみたすことを示せ .
- (2) 離散型確率変数 X が確率関数 $f_X(x)$ を持つとき, $\mathbb{P}(4 \leq X \leq 7)$ を求めよ .

問題 1.16

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{x^2(1-x)}{a}, & (0 < x < 1), \\ 0, & (\text{その他}) \end{cases}$$

とする . ただし, $a > 0$ とする .

- (1) $f_X(x)$ が確率密度関数となるように a を定めよ .
- (2) 連続型確率変数 X が (1) で求めた確率密度関数を持つとき, その分布関数を求めよ .
- (3) 連続型確率変数 X が (1) で求めた確率密度関数を持つとき, $\mathbb{P}(X \leq 1/2)$ を求めよ .

問題 1.17 $F_X(\cdot)$ を連続型確率変数 X の分布関数とし, $f_X(\cdot)$ をその確率密度関数とし, x_0 を $F_X(x_0) < 1$ なる固定された点とする . このとき,

$$g(x) = \begin{cases} f_X(x)/[1 - F_X(x_0)] & x \geq x_0 \\ 0 & x < x_0 \end{cases}$$

は命題 1.10 で与えられた確率密度関数の条件をみたすことを示せ .

問題 1.18 離散型確率変数 X は確率関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{2} & (x = -1, 1) \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとする .

- (i) X の分布関数 $F_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x)$ を求めよ .
- (ii) X と X^2 の期待値 $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ を求めよ .

問題 1.19 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{2} & (-1 \leq x \leq 1) \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとする .

- (i) X の分布関数 $F_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x)$ を求めよ .
 (ii) X と X^2 の期待値 $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ を求めよ .

問題 1.20 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} e^{-x} & (x > 0) \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

をもつとする .

- (i) X の分布関数 $F_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x)$ を求めよ .
 (ii) X と X^2 の期待値 $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ を求めよ .

問題 1.21 X を連続型確率変数とし, a, b を定数とする .

- (i) $\mathbb{P}(X \geq a) = 1$ ならば, $\mathbb{E}[X] \geq a$ を示せ .
 (ii) $\mathbb{P}(X \leq b) = 1$ ならば, $\mathbb{E}[X] \leq b$ を示せ .

問題 1.22 X を離散型確率変数とし, 確率関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{x}{6} & (x = 1, 2, 3), \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

をもつとする .

- (i) $\mathbb{E}[X], \mathbb{E}[X^2]$ を求めよ .
 (ii) $\mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2]$ を求めよ .
 (iii) $Y = (X - 1)^2$ としたとき, $\mathbb{E}[Y]$ と $\mathbb{E}[(Y - \mathbb{E}[Y])^2]$ を求めよ .
 (iv) X の分布関数を求め, グラフに描け .

問題 1.23 X を連続型確率変数とし, 確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} 6x(1-x) & (0 < x < 1), \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

をもつとする .

- (i) $\mathbb{E}[X], \mathbb{E}[X^2]$ を求めよ .
 (ii) $\mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2]$ を求めよ .
 (iii) $Y = -3X + 10$ としたとき, $\mathbb{E}[Y]$ と $\mathbb{E}[(Y - \mathbb{E}[Y])^2]$ を求めよ .
 (iv) X の分布関数を求め, グラフに描け .

問題 1.24 X を連続型確率変数で $\mathbb{E}[X^2] < \infty$ とし, a, b を定数とする . このとき, 以下を示せ .

- (i) $\text{VAR}[a] = 0$.
 (ii) $\text{VAR}[aX + b] = a^2 \text{VAR}[X]$
 (iii) $\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2$

問題 1.25 X は連続型確率変数で $\mathbb{E}[X^2] < \infty$ とする. $g(t) = \mathbb{E}[(X - t)^2]$ は $t = \mathbb{E}[X]$ で最小となることを示せ. すなわち,

$$g(t) \geq \text{VAR}[X], \quad t \in \mathbb{R}$$

が成り立つ.

問題 1.26 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} 1 & (0 < x < 1), \\ 0 & (\text{その他}), \end{cases}$$

をもつとする. このとき, 以下の問いに答えよ.

- (i) X の分布関数 $F_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x)$ ($x \in \mathbb{R}$) と X の期待値 $\mathbb{E}[X]$ を求めよ. ただし, $F_X(x)$ は \mathbb{R} 上の関数であることがわかるように答えよ.
- (ii) $Y = -2 \log X$ としたとき, Y の分布関数 $F_Y(y) = \mathbb{P}(Y \leq y)$ ($y \in \mathbb{R}$) と確率密度関数 $f_Y(y)$ を求めよ. ただし, $F_Y(y)$ は \mathbb{R} 上の関数であることがわかるように答えよ. また, $f_Y(y) > 0$ となる y の範囲を明示すること.
- (iii) Y の期待値 $\mathbb{E}[Y]$ を求めよ.

問題 1.27 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \exp\left\{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right\} \quad (-\infty < x < \infty)$$

を持つとする. ただし, μ, σ は定数で $-\infty < \mu < \infty, 0 < \sigma < \infty$ とし, $\exp(x) = e^x$ である.

$$Z = \frac{X - \mu}{\sigma}$$

と定義したとき, 以下の問いに答えよ.

- (i) Z の確率密度関数 $f_Z(z)$ を求めよ.
- (ii) $10Z + 50$ の期待値 $\mathbb{E}[10Z + 50]$ と分散 $\text{VAR}[10Z + 50]$ を求めよ.

問題 1.28 確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{2}, & -1 < x < 1, \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとする.

- (i) X の分布関数を求め, そのグラフを描け.
- (ii) $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ および $\text{VAR}[X]$ を求めよ.
- (iii) $Y = X^2$ としたとき, Y の確率密度関数 $f_Y(y)$ を求めよ. さらに,

$$\int_{-\infty}^{\infty} f_Y(y) dy = 1$$

を確認せよ.

- (iv) $\mathbb{E}[Y]$ を Y の確率密度関数を用いて計算せよ.

問題 1.29 確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} e^{-x}, & x > 0, \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとする.

- (i) X の分布関数を求め, そのグラフを描け.
- (ii) $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ および $\text{VAR}[X]$ を求めよ.
- (iii) $Y = X^3$ としたとき, Y の分布関数を求めよ.
- (iv) Y の確率密度関数を (iii) で求めた分布関数を微分することで求めよ.
- (v) Y の確率密度関数を命題 1.13 を用いて求めよ.
- (vi) $Z = \log X$ としたとき, Z の分布関数を求めよ.
- (vii) Z の確率密度関数を (vi) で求めた分布関数を微分することで求めよ.
- (viii) Z の確率密度関数を命題 1.13 を用いて求めよ.
- (ix) $W = e^X$ としたとき, W の分布関数を求めよ.
- (x) W の確率密度関数を (ix) で求めた分布関数を微分することで求めよ.
- (xi) W の確率密度関数を命題 1.13 を用いて求めよ.

問題 1.30 離散型確率変数 X は確率関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{6}, & x = 1, 2, 3, 4, 5, 6, \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

を持つとし, $Y = (X - 3)^2$ とおく.

- (i) $\mathbb{E}[X]$ と $\mathbb{E}[X^2]$ を求めよ.
- (ii) Y の確率関数 $f_Y(y)$ を求めよ. さらに

$$\sum_y f_Y(y) = 1$$

を確認せよ.

- (iii) $\mathbb{E}[Y]$ を (ii) で求めた Y の確率関数を利用して求めよ.
- (iv) $\mathbb{E}[Y]$ を期待値の性質と (i) で求めた X の 2 次までの積率を利用して求めよ.

問題 1.31 離散型確率変数 X は確率関数

$$f_X(x) = \begin{cases} \frac{1}{3} & (x = -1, 0, 1), \\ 0 & \text{その他} \end{cases}$$

を持つとする.

- (i) X の分布関数 $F_X(x)$ のグラフを描け.

(ii) X の平均 $\mathbb{E}[X]$, X の 2 次と 3 次の原点まわり積率 $\mathbb{E}[X^2]$, $\mathbb{E}[X^3]$ を求めよ⁷.

問題 1.32 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} c(1-x^2) & (-1 < x < 1) \\ 0 & (\text{その他}) \end{cases}$$

をもつとする。ただし, c は正の定数とする。このとき, 以下の問いに答えよ。

- (i) $f_X(x)$ が確率密度関数になるように c を定めよ。
 (ii) X の期待値と分散 $\mathbb{E}(X)$, $\text{VAR}(X)$ を求めよ。
 (iii) X の分布関数 $F_X(x) = \mathbb{P}(X \leq x)$ を求めよ。ただし, $-\infty < x < \infty$ である。
 (iv) 確率 $\mathbb{P}(-0.9 < X < 0.9)$ を求めよ。
 (v) チェビシエフの不等式を用いて確率 $\mathbb{P}(-0.9 < X < 0.9)$ の下限を求めよ。

問題 1.33 連続型確率変数 X は確率密度関数

$$f_X(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}\sigma} \exp\left\{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right\} \quad (-\infty < x < \infty)$$

を持つとする。ただし, μ, σ は定数で $-\infty < \mu < \infty$, $0 < \sigma < \infty$ とし, $\exp(x) = e^x$ である。

$$Z = \frac{X - \mu}{\sigma}$$

と定義したとき, 以下の問いに答えよ。

(i) Z の分布関数

$$F_Z(z) = \mathbb{P}(Z \leq z) \quad (-\infty < z < \infty)$$

を求めよ。

(ii) Z の期待値と分散は

$$\mathbb{E}[Z] = 0, \quad \text{VAR}[Z] = 1$$

で与えられることを示せ。ただし, $\int_{-\infty}^{\infty} f_X(x) dx = 1$ および $\lim_{x \rightarrow \pm\infty} x \exp(-x^2/2) = 0$ は証明なしで用いてよい。

(iii) X の期待値と分散 $\mathbb{E}[X]$ と $\text{VAR}[X]$ を求めよ。

問題 1.34 Ω を標本空間とし, \mathcal{F} を Ω 上の完全加法族⁸とする。確率 \mathbb{P} は \mathcal{F} 上で定義された実数値関数でつぎの条件をみたすものであった。

(P1) 任意の $A \in \mathcal{F}$ に対して, $\mathbb{P}(A) \geq 0$

(P2) $\mathbb{P}(\Omega) = 1$

⁷ X の平均 は X の期待値と同じこと。また, X の 2 次の原点まわり積率は X^2 の期待値と同じこと。

⁸ Ω の部分集合のなす集まりで任意の可算回の集合演算に関して閉じている。

(P3) $i = 1, 2, \dots$ に対して $A_i \in \mathcal{F}$ かつ $A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j)$ ならば,

$$\mathbb{P}(\cup_{i=1}^{\infty} A_i) = \sum_{i=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_i)$$

(P1) から (P3) をどこでどのように使ったかを明示 (例に倣って) して以下の (i)–(iii) を証明せよ .

(i) (P1)–(P3) および (1.5) を用いてつぎのことを示せ : $B_1, B_2 \in \mathcal{F}$ とする .

$$B_1 \cap B_2 = \emptyset \quad \text{ならば,} \quad \mathbb{P}(B_1 \cup B_2) = \mathbb{P}(B_1) + \mathbb{P}(B_2) \quad (1.4)$$

(ii) (P1)–(P3) および (1.5) を用いてつぎのことを示せ : $B_3, B_4 \in \mathcal{F}$ に対して

$$\mathbb{P}(B_3 \cup B_4) \leq \mathbb{P}(B_3) + \mathbb{P}(B_4)$$

(iii) (P1)–(P3) , (1.4) および (1.5) を用いてつぎのことを示せ : $C_1, C_2 \in \mathcal{F}$ とする .

$$C_1 \subset C_2 \quad \text{ならば,} \quad \mathbb{P}(C_1) \leq \mathbb{P}(C_2)$$

例 : たとえば,

$$\mathbb{P}(\emptyset) = 0 \quad (1.5)$$

を示すには, $A_1 = \Omega, A_i = \emptyset (i \geq 2)$ とおくと

$$\Omega = \cup_{i=1}^{\infty} A_i \quad (1.6)$$

と

$$A_i \cap A_j = \emptyset (i \neq j) \quad (1.7)$$

となることに注意すれば,

$$\mathbb{P}(\Omega) = \mathbb{P}(\cup_{i=1}^{\infty} A_i) = \sum_{i=1}^{\infty} \mathbb{P}(A_i) = \mathbb{P}(\Omega) + \sum_{i=2}^{\infty} \mathbb{P}(\emptyset)$$

となる . ただし, 1 番目の等号は 1.6 からわかり, 2 番目の等号は (1.7) と (P3) からわかる . したがって,

$$\sum_{i=2}^{\infty} \mathbb{P}(\emptyset) = 0 \quad (1.8)$$

となる . しかし, (P1) から $\mathbb{P}(\emptyset) \geq 0$ なることと (1.8) から $\mathbb{P}(\emptyset) = 0$ がわかる .

第2章 1 次元の確率分布の代表的モデル

この章では、確率分布の具体的なモデルを学ぶ。

1 離散型確率変数のモデル

ベルヌーイ分布 確率変数 X は母数 p のベルヌーイ分布に従うとは、 X の確率関数が

$$f_X(x|p) = p^x(1-p)^{1-x}, \quad x = 0, 1$$

のときをいう。ただし、 $0 < p < 1$ である。この分布を $\text{Ber}(p)$ と記す。成功の確率が p ($0 < p < 1$)、失敗の確率が $1-p$ の試行をベルヌーイ試行とよび、この試行の成功を 1、失敗を 0 に対応させたものが X である。

定理 2.1 (ベルヌーイ分布の平均・分散)

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= p \\ \text{VAR}[X] &= p(1-p)\end{aligned}$$

証明 $\mathbb{E}[X] = \sum_{x=0,1} x f_X(x|p) = 0 \times f_X(0|p) + 1 \times f_X(1|p) = p$ よりわかる。
分散も同様に $\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2]$ に注意すれば、

$$\begin{aligned}\text{VAR}[X] &= \sum_{x=0,1} (x-p)^2 f_X(x|p) \\ &= (0-p)^2 \times f_X(0|p) + (1-p)^2 \times f_X(1|p) \\ &= p(1-p)\end{aligned}$$

からわかる。

□

二項分布 確率変数 X は母数 n と p の二項分布に従うとは, X の確率関数が

$$f_X(x|n, p) = \binom{n}{x} p^x (1-p)^{n-x}, \quad x = 0, 1, \dots, n$$

のときをいう. ただし, $n \geq 1$ は整数, $0 < p < 1$ である. この分布を $\text{BN}(n, p)$ と記す.

定理 2.2 (二項分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= np \\ \text{VAR}[X] &= np(1-p) \\ M_X(t) &= (pe^t + (1-p))^n, \quad t \in \mathbb{R} \end{aligned}$$

証明 まず, 積率母関数を求める. 二項定理を用いると $t \in \mathbb{R}$ に対して,

$$\begin{aligned} M_X(t) &= \mathbb{E}[e^{tX}] \\ &= \sum_{x=0}^n e^{tx} f_X(x|n, p) \\ &= \sum_{x=0}^n \binom{n}{x} (pe^t)^x (1-p)^{n-x} \\ &= (pe^t + (1-p))^n \end{aligned}$$

となることがわかる. つぎに, 定理 1.3 (積率母関数と積率の関係) を用いると

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. n(pe^t + (1-p))^{n-1} pe^t \right|_{t=0} \\ &= np \\ \mathbb{E}[X^2] &= \left. \frac{d^2}{dt^2} M_X(t) \right|_{t=0} \\ &= \left. n(n-1)(pe^t + (1-p))^{n-2} (pe^t)^2 \right|_{t=0} + \left. n(pe^t + (1-p))^{n-1} pe^t \right|_{t=0} \\ &= n(n-1)p^2 + np \end{aligned}$$

となり,

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = np(1-p)$$

がわかる .

□

幾何分布 確率変数 X はが母数 p の幾何分布に従うとは, X の確率関数が

$$f_X(x|p) = p(1-p)^{x-1}, \quad x = 1, 2, \dots$$

のときをいう . ただし, $0 < p < 1$ である . この分布を $G(p)$ と記す .

定理 2.3 (幾何分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \frac{p}{1-p} \\ \text{VAR}[X] &= \frac{1-p}{p^2} \\ M_X(t) &= \frac{p}{1-t(1-p)}, \quad t < \frac{1}{1-p} \end{aligned}$$

証明 略 .

□

負の二項分布 確率変数 X は母数 n と p の負の二項分布に従うとは, X の確率関数が

$$f_X(x|n, p) = \binom{n+x-1}{n-1} p^n (1-p)^x, \quad x = 0, 1, 2, \dots$$

のときをいう . ただし, $n \geq 1$ は整数, $0 < p < 1$ である . この分布を $\text{NBN}(n, p)$ と記す . 負の二項展開式 :

$$\frac{1}{p^n} = (p - (1-p))^n = \sum_{x=0}^{\infty} \binom{-n}{x} (-(1-p))^x = \sum_{x=0}^{\infty} \binom{n+x-1}{n-1} (1-p)^x$$

の両辺に p^n をかけた式の各項が確率関数である . ここで負の二項係数は

$$\binom{-n}{x} = \frac{1}{x!} (-n)(-n+1)\cdots(-n-x+1) = (-1)^x \binom{n+x-1}{n-1}$$

である .

定理 2.4 (負の二項分布の平均・分散)

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= n \frac{p}{1-p} \\ \text{VAR}[X] &= n \frac{1-p}{p^2}\end{aligned}$$

証明 略 .

□

ポアソン分布 確率変数 X は母数 λ のポアソン分布に従うとは, X の確率関数が

$$f_X(x|\lambda) = \frac{\lambda^x}{x!} e^{-\lambda}, \quad x = 0, 1, 2, \dots$$

のときをいう. ただし, $\lambda > 0$ である. この分布を $\text{Po}(\lambda)$ と記す.

定理 2.5 (ポアソンの平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= \lambda \\ \text{VAR}[X] &= \lambda \\ M_X(t) &= e^{\lambda(e^t-1)}\end{aligned}$$

証明 まず, 積率母関数を求める: $t \in \mathbb{R}$ に対して,

$$M_X(t) = \mathbb{E}[e^{tX}] = \sum_{x=0}^{\infty} e^{tx} f_X(x|\lambda) = e^{-\lambda} \sum_{x=0}^{\infty} \frac{(\lambda e^t)^x}{x!} = e^{-\lambda} e^{\lambda e^t} = e^{\lambda(e^t-1)}$$

となることがわかる. つぎに, 定理 1.3 (積率母関数と積率の関係) を用いると

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= \left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \lambda e^t e^{\lambda(e^t-1)} \right|_{t=0} = \lambda \\ \mathbb{E}[X^2] &= \left. \frac{d^2}{dt^2} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \lambda e^t e^{\lambda(e^t-1)} \right|_{t=0} + \left. (\lambda e^t)^2 e^{\lambda(e^t-1)} \right|_{t=0} \\ &= \lambda + \lambda^2\end{aligned}$$

となり,

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = \lambda$$

がわかる.

□

分布	母数	確率関数 $P(X = x)$	平均	分散
ベルヌーイ分布	$0 < p < 1$	$p^x(1-p)^{1-x}, x = 0, 1$	p	$p'1-p)$
二項分布	$n \geq 1, 0 < p < 1$	$\binom{n}{x} p^x(1-p)^{n-x}$ ただし, $x = 0, 1, \dots, n$	np	$np(1-p)$
幾何分布	$0 < p < 1$	$p(1-p)^{x-1}$ ただし, $x = 1, 2, \dots$	$\frac{p}{1-p}$	$\frac{1-p}{p^2}$
負の二項分布	$n \geq 1, 0 < p < 1$	$\binom{n+x-1}{n-1} p^n(1-p)^x$ ただし, $x = 1, 2, \dots$	$n \frac{p}{1-p}$	$n \frac{1-p}{p^2}$
ポアソン分布	$0 < \lambda < \infty$	$\frac{\lambda^x}{x!} e^{-\lambda}, x = 0, 1, 2, \dots$	λ	λ

2 連続型確率変数のモデル

一様分布 確率変数 X は区間 (α, β) の一様分布に従うとは, X が確率密度関数

$$f_X(x) = \begin{cases} 1/(\beta - \alpha), & (\alpha < x < \beta), \\ 0 & \text{その他} \end{cases}$$

を持つときをいう. この分布を $U(\alpha, \beta)$ と記すことにする.

定理 2.6 (一様分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \frac{\alpha + \beta}{2} \\ \text{VAR}[X] &= \frac{(\beta - \alpha)^2}{12} \end{aligned}$$

証明

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \int_{-\infty}^{\infty} x f_X(x) dx = \frac{1}{\beta - \alpha} \int_{\alpha}^{\beta} x dx = \frac{\alpha + \beta}{2} \\ \mathbb{E}[X^2] &= \int_{-\infty}^{\infty} x^2 f_X(x) dx = \frac{1}{\beta - \alpha} \int_{\alpha}^{\beta} x^2 dx = \frac{\beta^3 - \alpha^3}{3(\beta - \alpha)} \end{aligned}$$

となることから

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = \frac{\beta^3 - \alpha^3}{3(\beta - \alpha)} - \left\{ \frac{\alpha + \beta}{2} \right\}^2 = \frac{(\beta - \alpha)^2}{12}$$

となる.

□

正規分布 $(N(\mu, \sigma^2))$ 確率変数 X は母数 (μ, σ^2) の正規分布に従うとは、 X が確率密度関数

$$f_X(x|\mu, \sigma^2) = \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} \exp\left\{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right\}, \quad -\infty < x < \infty$$

を持つときをいう。ただし、 $-\infty < \mu < \infty, \sigma > 0$ である。特に、 $\mu = 0, \sigma^2 = 1$ のとき、正規分布 $N(0, 1)$ のことを標準正規分布という。

定理 2.7 (正規分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \mu \\ \text{VAR}[X] &= \sigma^2 \\ M_X(t) &= \exp\left(\mu t + \frac{\sigma^2 t^2}{2}\right), \quad -\infty < t < \infty \end{aligned}$$

証明 まず、 Z が標準正規分布に従うとき、 $X = \sigma Z + \mu$ とおくと X は $N(\mu, \sigma^2)$ に従うことを示す。 $g(z) = \sigma z + \mu$ と $g^{-1}(x) = (1/\sigma)(x - \mu)$ として命題 1.13 を用いると

$$\begin{aligned} f_X(x) &= f_Z(g^{-1}(x)) \left| \frac{d}{dx} g^{-1}(x) \right| = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-(x-\mu)^2/(2\sigma^2)} \left| \frac{1}{\sigma} \right| \\ &= \frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} \exp\left\{-\frac{(x-\mu)^2}{2\sigma^2}\right\} \end{aligned}$$

となり、 X は $N(\mu, \sigma^2)$ に従うがわかった。 Z の確率密度関数を $f_Z(z) = (1/\sqrt{2\pi})e^{-z^2/2}$ とおくことにする。つぎに、期待値の線形性と分散の性質より

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \sigma\mathbb{E}[Z] + \mu \\ \text{VAR}[X] &= \sigma^2\text{VAR}[Z] \end{aligned}$$

となることに注意する。 $zf_Z(z)$ は奇関数であるので、

$$\mathbb{E}[Z] = \int_{-\infty}^{\infty} zf_Z(z) dz = 0$$

がわかる．また， $z^2 f_Z(z)$ は偶関数であることと部分積分の公式を用いると

$$\begin{aligned}\text{VAR}[Z] &= \int_{-\infty}^{\infty} z^2 f_Z(z) dz = 2 \int_0^{\infty} z^2 f_Z(z) dz \\ &= 2 \int_0^{\infty} z(-f_Z(z))' dz \\ &= 2 \left\{ [-zf_Z(z)]_0^{\infty} + \int_0^{\infty} f_Z(z) dz \right\} = 1\end{aligned}$$

がわかる．最後の等号は $\lim_{z \rightarrow \infty} zf_Z(z) = 0$ と $f_Z(z)$ は偶関数であることからわかる．

最後に， Z の積率母関数を求める：

$$\begin{aligned}M_Z(t) &= \mathbb{E}[e^{tZ}] \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} e^{tz} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-z^2/2} dz \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left\{-\frac{(z-t)^2}{2} + \frac{t^2}{2}\right\} dx \\ &= e^{t^2/2} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left\{-\frac{(z-t)^2}{2}\right\} dz = e^{t^2/2}.\end{aligned}$$

したがって，

$$\begin{aligned}M_X(t) &= \mathbb{E}[e^{tX}] = \mathbb{E}[e^{t(\sigma Z + \mu)}] = e^{\mu t} \mathbb{E}[e^{\sigma t Z}] = e^{\mu t} M_Z(\sigma t) \\ &= \exp\left\{\mu t + \frac{\sigma^2 t^2}{2}\right\}.\end{aligned}$$

□

指数分布 ($\text{Ex}(\lambda)$) 確率変数 X は母数 λ の指数分布に従うとは， X が確率密度関数

$$f_X(x|\lambda) = \begin{cases} \lambda e^{-\lambda x}, & (0 < x < \infty) \\ 0, & \text{その他} \end{cases}$$

を持つときをいう．ただし， $0 < \lambda < \infty$ である．この分布を $\text{Ex}(\lambda)$ と記すことにする．

定理 2.8 (指数分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= \frac{1}{\lambda} \\ \text{VAR}[X] &= \frac{1}{\lambda^2} \\ M_X(t) &= \frac{\lambda}{\lambda - t}, \quad -\infty < t < \lambda\end{aligned}$$

証明 まず、積率母関数を求める。 $t < \lambda$ に対して、

$$\begin{aligned}M_X(t) &= \mathbb{E}[e^{tX}] = \int_{-\infty}^{\infty} e^{tx} f_X(x|\lambda) dx = \int_0^{\infty} e^{tx} f_X(x|\lambda) dx \\ &= \lambda \int_0^{\infty} e^{-(\lambda-t)x} dx = \frac{\lambda}{\lambda - t}\end{aligned}$$

となることがわかる。つぎに、定理 1.3 (積率母関数と積率の関係) を用いると

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= \left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{\lambda}{(\lambda - t)^2} \right|_{t=0} = \frac{1}{\lambda} \\ \mathbb{E}[X^2] &= \left. \frac{d^2}{dt^2} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{2\lambda}{(\lambda - t)^3} \right|_{t=0} = \frac{2}{\lambda^2}\end{aligned}$$

となり、

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = \frac{1}{\lambda^2}$$

がわかる。

直接、積分を計算して積率をもとめてみよう：まず、

$$\int_{-\infty}^{\infty} f_X(x|\lambda) dx = \int_0^{\infty} \lambda e^{-\lambda x} dx = \left[-e^{-\lambda x} \right]_0^{\infty} = -\lim_{x \rightarrow \infty} e^{-\lambda x} + 1 = 1$$

に注意する。これと部分積分より

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X] &= \int_{-\infty}^{\infty} x f_X(x|\lambda) dx \\ &= \int_0^{\infty} x (-\lambda e^{-\lambda x})' dx \\ &= \left[-x e^{-\lambda x} \right]_0^{\infty} + \int_0^{\infty} e^{-\lambda x} dx \\ &= -\lim_{x \rightarrow \infty} x e^{-\lambda x} + \frac{1}{\lambda} \int_0^{\infty} \lambda e^{-\lambda x} dx \\ &= \frac{1}{\lambda}.\end{aligned}$$

再度，上の結果と部分積分を持ちいれば，

$$\begin{aligned}
 \mathbb{E}[X^2] &= \int_{-\infty}^{\infty} x^2 f_X(x|\lambda) dx \\
 &= \int_0^{\infty} x^2 (-e^{-\lambda x})' dx \\
 &= \left[-x^2 e^{-\lambda x} \right]_0^{\infty} + 2 \int_0^{\infty} x e^{-\lambda x} dx \\
 &= -\lim_{x \rightarrow \infty} x^2 e^{-\lambda x} + \frac{2}{\lambda} \int_0^{\infty} \lambda x e^{-\lambda x} dx \\
 &= \frac{2}{\lambda} \frac{1}{\lambda} = \frac{2}{\lambda^2}.
 \end{aligned}$$

□

ガンマ分布 確率変数 X は母数 α, β のガンマ分布に従うとは， X が確率密度関数

$$f_X(x|\alpha, \beta) = \begin{cases} \frac{1}{\Gamma(\alpha)\beta^\alpha} x^{\alpha-1} \exp(-x/\beta), & (0 < x < \infty) \\ 0, & \text{その他} \end{cases}$$

を持つときをいう．この分布を $GA(\alpha, \beta)$ と記すことにする．

特に， $\alpha = n/2$, ($n \in \mathbb{N}$) と $\beta = 2$ のとき，ガンマ分布 $GA(n/2, 2)$ を自由度 n のカイ自乗分布という．ただし， $0 < \alpha, \beta < \infty$ である．

注意 2.1 $\beta = 1/\lambda$ と $\alpha = 1$ のとき，指数分布になる．

定理 2.9 (ガンマ分布の平均・分散・積率母関数)

$$\begin{aligned}
 \mathbb{E}[X] &= \alpha\beta \\
 \text{VAR}[X] &= \alpha\beta^2 \\
 M_X(t) &= (1 - \beta t)^{-\alpha}, \quad t < 1/\beta
 \end{aligned}$$

証明 まず，積率母関数を求める．

$$\int_0^{\infty} \frac{1}{\Gamma(\alpha)\beta^\alpha} x^{\alpha-1} \exp(-x/\beta) dx = 1$$

に注意する． $t < 1/\beta$ に対して，

$$\begin{aligned} M_X(t) &= \mathbb{E}[e^{tX}] = \int_{-\infty}^{\infty} e^{tx} f_X(x|\alpha, \beta) dx = \int_0^{\infty} e^{tx} f_X(x|\alpha, \beta) dx \\ &= \frac{1}{\Gamma(\alpha)\beta^\alpha} \lambda \int_0^{\infty} x^{\alpha-1} \exp(-x(1-\beta t)/\beta) dx = \left(\frac{1}{1-\beta t}\right)^\alpha \end{aligned}$$

となることがわかる．つぎに，定理 1.3 (積率母関数と積率の関係) を用いると

$$\begin{aligned} \mathbb{E}[X] &= \left. \frac{d}{dt} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{\alpha\beta}{(1-\beta t)^{\alpha+1}} \right|_{t=0} = \alpha\beta \\ \mathbb{E}[X^2] &= \left. \frac{d^2}{dt^2} M_X(t) \right|_{t=0} = \left. \frac{\alpha(\alpha+1)\beta^2}{(1-\beta t)^{\alpha+2}} \right|_{t=0} = \alpha(\alpha+1)\beta^2 \end{aligned}$$

となり，

$$\text{VAR}[X] = \mathbb{E}[X^2] - \{\mathbb{E}[X]\}^2 = \alpha\beta^2$$

がわかる．

□

分布	母数	確率密度関数	平均	分散
一様分布	$\alpha, \beta (\alpha < \beta) \in \mathbb{R}$	$\frac{1}{(\beta - \alpha)}, \alpha < x < \beta$	$\frac{\alpha + \beta}{2}$	$\frac{(\beta - \alpha)^2}{12}$
標準正規分布	なし	$\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-x^2/2}, x \in \mathbb{R}$	0	1
正規分布	$\mu \in \mathbb{R}, \sigma^2 > 0$	$\frac{1}{\sigma\sqrt{2\pi}} e^{-(x-\mu)^2/(2\sigma^2)}, x \in \mathbb{R}$	μ	σ^2
指数分布	$\lambda > 0$	$\lambda e^{-\lambda x}, x > 0$	$\frac{1}{\lambda}$	$\frac{1}{\lambda^2}$
ガンマ分布	$\alpha, \beta > 0$	$\frac{1}{\Gamma(\alpha)\beta^\alpha} x^{\alpha-1} \exp(-x/\beta), x > 0$	$\alpha\beta$	$\alpha\beta^2$
カイ自乗分布	$n \in \mathbb{N}$	$\frac{1}{\Gamma(n/2)2^{n/2}} e^{-x/2} x^{(n/2)-1}, x > 0$	n	$2n$

3 演習問題

問題 2.1 コインを 3 回投げたときの次の確率を求めよ．

- (1) 3 回表が出る確率．
- (2) 2 回表で 1 回裏の出る確率．
- (3) 少なくとも 1 回表の出る確率．

問題 2.2 サイコロを 5 回投げたときの次の確率を求めよ．

- (1) 3 の目が 2 回が出る確率 .
- (2) 3 の目が多くとも 1 回出る確率 .
- (3) 少なくとも 2 回出る確率 .

答えは二項分布の確率に式の数値を代入したままでよい .

問題 2.3 X は母数 n と p の二項分布に従うとする . ただし , n は自然数 , $0 < p < 1$ とする . $np = \lambda (\lambda > 0$ は固定した値) として , $n \rightarrow \infty$ としたときに ,

$$\mathbb{P}(X = x) \rightarrow \frac{\lambda^x e^{-\lambda}}{x!}$$

となることを示せ .

ちなみに , 母数 10 と 0.1 の二項分布に従う確率変数を X とすれば ,

$$\mathbb{P}(X = 2) = \binom{10}{2} \left(\frac{1}{10}\right)^2 \left(\frac{9}{10}\right)^{10-2} = 0.1937$$

$\lambda = np = (10)(0.1) = 1$ のポアソン分布でこの確率を近似すれば

$$\mathbb{P}(X = 2) \approx \frac{\lambda^2 e^{-\lambda}}{2!} = \frac{1^2 e^{-1}}{2!} = 0.1839$$

となる .

問題 2.4 確率変数 Z は標準正規分布 $N(0, 1)$ に従うとする . すなわち , 標準正規分布の確率密度関数 $f_Z(z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-z^2/2}$ を用いて , 以下の確率を表現し , 数表を用いて確率を求めよ .

- (1) $\mathbb{P}(0 < Z \leq 1.2)$
- (2) $\mathbb{P}(-0.68 < Z \leq 0)$
- (3) $\mathbb{P}(-0.46 < Z \leq 2.21)$
- (4) $\mathbb{P}(0.81 < Z \leq 1.94)$
- (5) $\mathbb{P}(Z > -1.28)$

ヒント : $\mathbb{P}(Z > 1.2) = 0.115$, $\mathbb{P}(Z > 0.68) = 0.248$, $\mathbb{P}(Z > 0.46) = 0.323$, $\mathbb{P}(Z > 2.21) = 0.014$, $\mathbb{P}(Z > 0.81) = 0.209$, $\mathbb{P}(Z > 1.94) = 0.026$, $\mathbb{P}(Z > 1.28) = 0.100$

問題 2.5 確率変数 X は正規分布 $N(151, (15)^2)$ に従うとする . 標準正規分布の確率密度関数 $f_Z(z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-z^2/2}$ を用いて , 以下の確率を表現し , 数表を用いて確率を求めよ .

- (1) $\mathbb{P}(119.5 < X \leq 155.5)$
- (2) $\mathbb{P}(X > 185.5)$

ヒント : $\mathbb{P}(Z > 2.10) = 0.018$, $\mathbb{P}(Z > 0.30) = 0.382$, $\mathbb{P}(Z > 2.30) = 0.011$